

# 魔法少女と 魔術師



呼ばないで

前編

憐一悔

挿絵 / 河川敷

Presented by 恋は上級

本作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません。

また本作品を無断で複製、配布、転載、配信することを禁止します。

※本作品は見開き表示がデフォルトで設定されていますが、左右のページが逆で表示される場合は、左記の設定変更をお試しください。

「編集」↓「環境設定」↓「言語（もしくは言語環境）」↓「デフォルトの読み上げ方向」↓「右から左へ」を選択

目次

- ・ 3 p ｝ 「第一話 魔法少女、始めました」
- ・ 1 0 3 p ｝ 「第二話 もう一人の魔法少女」
- ・ 1 9 7 p ｝ 「第三話 マジカルプリティーなんかは省みない」
- ・ 3 0 1 p ｝ 「第四話 彼女の願いは」
- ・ 3 8 7 p ｝ 「第五話最強の代償」 4 7 5 P ｝
- ・ 5 2 1 p ｝ 「第六話 祝！ 彼氏とラブラブえっち！」
- ・ 6 6 1 p ｝ 「おまけ短編その一 教育的指導」
- ・ 6 9 1 p ｝ 「俺の上司がこんなロリ巨乳なわけがない」
- ・ 7 2 9 p ｝ 「その三 魔法人妻の潜入捜査 前編」
- ・ 7 6 5 p ｝ 挿絵集＋セリフ差分

第一話「魔法少女、始めました」

「そう、目を瞑って。そのまま眠るように。出来るだけリラックスしてくれ。子供の頃の楽しい記憶を思い浮かべると良い」

いつもと同じように、『彼』は抑揚の一つも感じられない口調で言葉を紡ぐ。

「それもマニュアル通りなの？」

いまだに整わない呼吸をなんとか抑えながら、小馬鹿にするように鼻で笑う。もはや、『彼』を信用するほか手段は無い。まだ熱気が籠っている自室のベッドで横たわったまま目を瞑る。服も下着も着る余力は無い。そもその必要も無いらしい。

瞼の裏に暗闇が広がる。子供のころの楽しい記憶？ 目を瞑りながら苦笑いを浮かべる。不遇な幼少期を過ごしたつもりはないけれど、別段懐かしむような思い出もない。冷たい子供だとよく言われた。子供ではなくなつたが今もたまに言われる。自分でもそう思う。あれは小学校の時だったか。クラスで飼っ

ていた猫が、ふとした拍子に道路に飛び出して車に轢かれて死んだ。皆が鼻水を垂らして泣いているのに、あたしはただ無表情でその場に立ち尽くしていた。勿論それなりに悲しかったが涙は出なかった。皆はあたしを冷たいと責め立てたが、そういえばサトシだけは庇ってくれたっけ。

身体にじんわりと熱が伝わっていく。先ほどまでの『行為』による身体の火照りとはまた違う。びりびりと神経の一筋一筋に不快な刺激が流れていく。それはやがて収束し束になると、丸籠を編むように球体となってあたしを包み込む。

「完了した。もう目を開けても良い」

抑揚の無い声。もう少し感情を込めて喋れないものか。いや、他人から見たらあたしもこんな風なのだろうか。それはちよつと嫌だな。恐る恐る瞼を開ける。

違和感にはすぐに気づいた。視界に映る見慣れた我が家の天井。白色だったはずのそれは、どこかくすんだ灰色に見える。出来の悪い3D映像のように霞がかったいた。

ゆっくりと上半身を起こす。裸だったはずのあたしは、いつの間にか衣服を

身にまとっていた。ベッドから足を下ろし、腰を掛けた状態で姿見に目を向ける。

「良かった」

今の自分の姿を確認すると、自然と声が漏れた。

「気に入ってくれたのならこちらとしても幸いだ」

「思ってたようなフリフリじゃなかった」

「そういう反応は珍しい」

「可愛いドレスとか着せられても似合わないだろうし」

その変貌に対して、あたしは特に何の感慨も無くベッドから立ち上がり、腰を左右に捻ってその衣装を確認する。それは深紫を基調とした武道袴だった。

「私の所見によると、君の容姿は価値観や好みを平均化すれば、この国の同世代の女性の中では、間違いなく上から数えた方が早い」

彼の方を一瞥すると、彼の周りに青い光がうつすら見える。

「あ、そう。ありがと」

興味なさそうに答えながら両手を軽く上げたり膝を曲げたりする。普段と特に変わった感覚は無い。

「しかしこれじゃあんまり魔法少女って感じしないね。まあ着慣れてるからいいけど」

彼は黙って、あたしの後頭部を指差した。それを受けて姿見に顔を寄せて横を向く。するといつも後ろ髪を結っているゴムが大きく変化していることに気づく。和風の衣装にはミスマツチな、ゴシック調の髪留めがあたしのポニーテールを結っている。赤い花を模しているようだが、それが何なのかはわからない。

「ああ本当だ。でもこれくらいじゃ誰もあたしを魔法少女だなんて思わないでしょう」

「装甲は少女それぞれの内面的性質で決まる。デザインしたのは無意識の君自身だ。そもそも、『こちら』では誰かに会うということは基本的には無い。いや、誰も君に気づけない、という表現をすべきか」

こちら？ と口に出す前に『それ』に気づく。姿見に映る、いまだベッドに横たわったままの全裸の自分。あまりに奇怪な光景。飛び跳ねそうな驚愕を喉元でやり過ごす。

「……ああ、そう言えばあんた言ったね。幽体離脱みたいなもんだって」

彼は感心するようにほう、とため息をついた。

「君が冷静に物事と対峙できる人間で私は大変助かっている。たとえそれが君達にとって突拍子もない出来事だとしてもだ。パートナーとして改めて君との邂逅に感謝したい」

何の感情も見られない賛辞を受け流しながら、首を左右に曲げる。骨が擦れる音がした。霊体とやらにも骨はあるらしい。

「今までの女の子は違った？」

「ああ。いざ覚悟を決めたように見えても、実際に『こちら側』に來ると、周囲の環境の変化に戸惑い狼狽える少女が絶對的に多数だった」

「そりゃそうでしょ……」

何の感情も浮かべずそんな無神経なことを言いのける彼に、呆れるように被子を振る。飼ひ猫が死んだ時のクラスメイトも、あたしをこんな風に思っていたのだろうか。今更ながらに自己嫌悪。

「あんたはもう少し、乙女心ってやつを勉強した方がいいよ。サトシと一緒に  
ん」

「必要とあれば適切なアップロードが為されるはずだ」



「はいはいそうですか。で？ あたしはどうしたらいいんだっけ？」

「彼を苦しめる元凶であるカルマがこの付近に存在しているはずだ。それを抹消すればいい」

「もうちょい具体的かつ端的にお願ひ」

「君にとつての敵が居る。倒せ。以上だ」

「あんまり変わってないんだけど、まあいいわ」

「やり方は既にわかっているはずだ。解脱が終われば、自動的にその霊体の扱いは記憶されるようになっていく。ただの知識としてではなく、手続き記憶としてだ」

「そうね。何か不思議。寝て起きたら急に自転車乗ってた、みたいな」

右手を開き、それをじっと見つめる。

「※※※※」

なんと発音したのか自分ですらわからない。ずっと昔から使っていた慣れ親しんだ挨拶文句のように、自然とその言葉が口から出た。

象形文字のような光が手のひらの上で螺旋状に煌々と同時に、その手には一見竹刀のようなものが握られていた。それを軽く左右に振る。

「普通杖とかじゃないの？」

刀身は幾何学模様で薄っすら発光している。剣先には銃口のようなノズルが着いていた。

「それも君の内面的性質だ」

「ふーん。ま、いいや。こいつは信綱って名前にしよう」

剣道を始めた時分も、初めて買ってもらった竹刀が嬉しくて、そんな名前をつけていたような気がする。

「名前なぞ好きにすればいい。さあ、そろそろ行った方が良いだろう。おそろく夜明けまでにはまたあのカルマが来ると予想される」

「あんたは？」

「ここにいる。同行したとしても何も出来ない。私達『代理人』はこちら側を感知できるだけで干渉は出来ない。霊体だけの存在に干渉できるのは、同じく霊体だけの存在だ。そして魔法少女として解脱できるのは君たち少女だけ。私に出来る役割は、霊体の抜けた君の実体を守ることくらいだ」

「寝てるからって変なことしないでよ」

「勿論だ。君と私はパートナーだ。君が嫌がることはしない」

その宣言に対して大げさに溜息をつく。いったいどの口がそんな言葉を吐くのか。いや。これは自分で選んだ道。誰も呪うまい。

「……了解。あのカルマとやらはまだこの辺に居るのね？」

「ああ。それは間違い無い。サトシ君の実体がある位置はわかっているな？  
最悪そこで待ち構えていれば良いが、出来れば君から探し出して狩りに出るのが良策といえる。可能な限り、カルマをサトシ君に近づかせない方が良いからだ。君の属性は『林』。感知能力に長けている。外に出ればすぐにでも発見できるだろう。そして君の性能ならば、この程度の相手ならば一蹴出来ると確信している。何も心配要らない。いつも通り……そう、泰然自若というやつだ」  
彼に向かって黙って頷くと、部屋の窓を開ける。実世界、というべきか、元々あたしが居た世界の窓は閉まったままだが、半透明にくすんだ色の『こちら側』の窓は開く。実世界の窓をまるで幽霊のように通り抜ける。のように、ではなく、実際今は幽霊みたいなものだった、と思い出した。はっきりと見えている物を通り抜けるのは変な感覚だった。

「なんだけ気持ち悪い」

「確認しておくが、霊体が死んだら実体の君も死ぬ。わかっているな」

「わかってる」

躊躇せずに返答する。怖くない、といえれば嘘になる。しかしサトシが居ない世界など想像も出来ない。あたしはまだ自分から気持ちを伝えていない。このまま終わるなど絶対に嫌だ。

「その他にも色々々と説明しないといけないことがあるのだが」

「とりあえずあいつぶっ倒してくる。それからいいでしょ？」

「わかった」

屋根に飛び降りると、一度深呼吸をして見上げた。夜空はやはり『こちら』でも暗い。しかしその闇の色には、遠くで山が燃えているように赤味が掛かっていた。そしてそれとは対を為すよう青い月。まるで地球のよう。その不気味な光景に臆することはない。怖いのは唯一つ。サトシを救えないことだけ。

目を閉じて、自分を中心に球状のドームを想像し、創造する。誰に教わったわけでもない。自然とそうしていた。世界を作り、そしてそれを広げる。それは一瞬でこの街全てを包み込んだ。後ろで、「素晴らしい……」という感嘆の声が聞こえるが無視。あたしの世界に包まれ、納まったすべての息遣いや鼓動まで手に取るように感知できる。

居た。

ゆっくりと目を開ける。元々釣り目がちな自分の目が、陰しく殺気を帯びたのが自分でもわかる。上体を前のめりに屈んで、地面を蹴る。信綱を握る右手に、一際強い感情が流れた。

時を遡ること約二十時間前。

木曜日朝。春の訪れを予感させる陽光が煌いている。しかし陰暦はまだ如月を刻んだばかり。その空気は突き刺すように寒い。S市は日本でも有数の経済都市だが、その町並みはどちらかといえば古めかしい雰囲気が残っている。海側に並ぶコンビナート郡から小さな丘を挟むと、閑静な住宅街がひっそりと佇む。まるで市の中心街から押しやられたかのよう。

その中に建つ『田中家』という表札を掲げた家の前に、一人の少女が白い息を吐きながら立ち止まった。彼女の頬は寒さのせいかほんのりと紅潮している。その頬に自らの両手を当てる。その手のひらがどれほど冷たいのかを確認するように。そして一度チャイムを鳴らすと、応答を待たずに玄関を開けた。

「おはようございます」

家の奥まで届くようにしっかりと挨拶をする。彼女のややハスキーな声は、清しさを伴って田中家に響き渡った。奥から声が返ってくる。

「おはようアカリちゃん。勝手に入って」

「はい。失礼します」

アカリと呼ばれた少女は靴を脱ぐと、玄関先にある階段を昇った。その背中に「いつもごめんねー」と奥から声が掛かる。一段づつ段差を踏み歩く度に、彼女のポニーテールが揺れた。慣れた足取りで二階の廊下を歩き、『サトシ』とネームプレートが掛かった部屋の前で足を止める。

一度目を瞑って深呼吸。何百回、何千回と繰り返したが慣れることはない。とく、とく、と鼓動が高まる。

ノック。返事は無い。

「入るよ？」

先ほどまでの活発な声とは違い、まるで相手に届かずつもりなどないかのよくな控えめな音量。音を立てずに扉を開ける。簡素というよりは殺風景ともとれるような部屋。ポスターの一つも貼っていない。無駄に身の回りを裝飾することを嫌う彼の価値観は、彼女にとっても共感できるものだった。忍び足でべ

ツドに近づく。仰向けに寝ているサトシの寝顔を覗き込むと、まだ冷え切った両手で彼の頬を挟み込む。

「はうっ」

びくりと身体を震わせ目を開く彼を見て、アカリは無邪気な笑顔を浮かべる。  
「『はうっ』だって。『はうっ』って」

サトシは顔をしかめながら億劫そうに上体を起こす。一度欠伸をすると、「もっと普通に起こしてくれよ」と口にした。

「気が向いたらね」

眠そうに目を擦る彼の顔を見ながら、満面の笑顔を浮かべる。アカリがサトシの前でしか見せない表情だ。これがアカリとサトシの日常で、そして幸せそのものだった。サトシが登校の準備を済ませると、二人は一緒に家を出た。

「いってらっしゃい」

温厚そうなサトシの父が二人を送り出す。その寂しくなった頭髪を見て、(サトシも将来は……)と興味深そうに並んで歩くサトシの頭を眺める。

「ん？ なんかついてるか？」

「んーん」

（まあ、別にいつか。そんなこと）と彼女は心の中でそんな事は些事だと笑い飛ばす。このまま二人で人生を歩みことに何の疑問も持たない。とはいえ二人の関係は恋人というわけではない。しかしサトシはアカリが自分を好きだととうにわかってるし、アカリも同様にサトシが自分を好きだとわかっている。小さい頃から兄妹のように育てられた二人は、やはりそのまま兄妹のような関係から抜け出せない。このままではいけない、とお互いが危機感を抱くこともあったが、ただ二人の間には、あまりに障害が無さ過ぎた。周りは二人が付き合っているとはかり思っているので、恋敵が出てくることがない。

アカリは少しきつそうな目つきをしているものの、その目鼻立ちを整っていたし、剣道部として凜とした佇まいを見せる傍らで、先ほどのように、年相応の飄々とした笑みを零すこともある。そのギャップが人気の秘訣となっただけか、異性同姓問わず隠れ人気が高かったりする。しかしどれだけ校内の有名な美男子がモーションを掛けようとも、びくりとも興味を示さない彼女に対しては、もはや当の二人が付き合っていることを否定しても、周りは「やっぱり付き合ってるんだ」と認識せざるをえない。そう周りに囁し立てられると、逆になんともなく引つつきづらいものである。しかしそれでもこうやって毎朝一緒に登校



する。

「おいサトシー待てってー」

彼らの遙か後方から声が掛かる。振り返ると見知った顔が、手を振りながら走ってくる。男は二人に追いつくと、はあはあ息を切らしながら、「またお前から一緒かよ。本当はもう結婚も済ませてんじゃねーの？」と膝に手をついたまま冗談めかして言う。アカリとは違い、サトシはこういう冗談に弱い。

「は、はあ？」と明確に狼狽する。

それを可愛い、と思ってしまうのはあばたもえくぼという事だろうか。そう思いながら、アカリが代弁する。

「もしそうだとしても、ユーキ君だけは絶対式には呼ばないわよ」

「おいお前の嫁ひでーぞ」

「まあ確かに、ユーキは呼びたくないな」

「お前もかブルータス」

ユーキと呼ばれた男は大袈裟な身振りで頭を抱え込む。バスケット部でエースを任されている彼の身長はただでさえ190cm近い。それに加え伸ばされた天然パーマはソフトアフロのようになっており、堀の深い顔立ちと相まってラテ

ン系のミュージシャンを思い浮かばせる。そのファンキーな容姿や言動、そしてバスケットエースという肩書きが加わって、女子にはわりと人気が高いという情報がアカリの耳にも入ってきている。それを友達から初めて聞かされたアカリの第一声は、「やだよあんな暑苦しいの」だった。そして内心では、（サトシのが全然格好良いし）と不機嫌にすらなっていた。

ユーキとは中学のころからの付き合いで、特に彼とは正反対の落ち着いた物腰のサトシとはウマが合うようで、親友といってもいいくらい仲が良い。必然的にアカリもそここの親交がある。そんな三人で肩を並べて登校するのもまたアカリの日常の一片だった。

信号待ちで立ち止まる。

「なあ今日学校終わったら遊びにいこーぜ」

「ああ、いーぞ」

ユーキはサトシにだけをそう誘った。

「ちよっと。なんであたしは誘わないのよ？」

「いや男同士のが楽し……」

唇を突き出し不満そうに口にするユーキに向かって、アカリはサトシにはわ

からないよう、バチ！　バチ！　と豪快にウインクする。それは（アンタ！　今日は何日かわかってんの！？）というアイコンタクトであった。詳細までもはわからないが、とにかく「邪魔をするな！」という気迫だけは伝わったようで、「あ、ああ……そういうや今日練習だったわ。すまんサトシ。やっぱまた今度な」と肩を落とす。

「え？　あ、そう」

「大変ね。バスケ部のエースさんは。あ、じゃあサトシ。今日はあたしに付き合っよ」

「お前も剣道部のエースだろ」

サトシが笑いながら軽くチョップをする。

「きよ、今日は軽めの練習だけなの」

打たれた額を押さえながらも、その表情はにんまりと笑みが零れている。

「ちえー、朝からイチャつきやがってよー。並んで歩くこつちの身にもなれってんだよ」

「誰も一緒に歩いてなんて頼んでないけど？」

露骨に冷たい口調に、先ほどもまでの少女らしい笑顔は面影も無い。とはいえ

アカリはユーキの事がけして嫌いではなかった。彼女はサトシ以外には誰にでもこうなのだ。それも昔から。それこそが、二人は付き合っていると噂される一因でもある。

「サトシと話す時みてーに普段から愛想良かったもつとモテるのになー」

アカリは無言で彼を睨みあげる。そんな二人に挟まれたサトシはいつも胃が痛そうに苦笑いを浮かべた。とはいえ、アカリの柔らかな態度が自分にだけ、という自室に関しては、素直に嬉しいと思ってしまう。だからこそ「お前らもう少し仲良くしろよ」という声にも、どこか諦観めいた穏やかさが感じられる。また信号待ち。ユーキが舌打ちする。

「あーあ。連続で引っ掛かるって超運悪い。なんかお前らと一緒に歩いていると、よく信号に引っ掛かるような気がするわ」

「ユーキ君の曰ごろの行いの所為でしょ」

そう冷たく言い放ったものの、実はそれはアカリも感じていたことではある。当の本人は、気まずそうに苦笑いを浮かべている。サトシにそんな顔をさせたユーキを横目で睨む。その眼光は中々のもので、ユーキは「ひい」と小さく喉の奥を鳴らして、「お、俺なんかしたっけ？」と怯えさせた。

サトシはいわゆる不幸体質だった。とにかく運が悪い。ゲーム屋で福袋を買ったら中身は大抵誰もが認める駄作が入っている。某国民的アニメのEDで催されるジャンケンには一度も勝ったことがない。今日だって、ここ数日はずっと雨だったのに、よりにもよってマラソンがある今日だけ晴れる。

その最たるものは、自分が生まれると同時に母親を失ったことだろう。次点は空手の大会で優勝した翌日、交通事故で左腕に障害を負ってしまったことだろうか。日常生活では不便はないものの、もう肩より上には上がることはない。しかしサトシはそんな自分の境遇に対して、一度たりとも愚痴を零したことがない。いつもその不遇を正面から受け止め、そして前に進める強さを持っている。今日のマラソンも一生懸命走るのだろう。アカリはそんなサトシだからこそ、いつの間にか尊敬と共に恋愛感情を抱くようになった。

放課後。帰宅部のサトシは先に帰っていったが、朝約束したとおり、後で会う段取りになっていた。その約束に胸を躍らせながらアカリは剣道場に向かう。その途中一人の少女とすれ違う。空手着に身を包んだ、その小さな女の子は、アカリの姿を見るなり駆け寄り、「アカリ先輩お疲れ様っす！」と一礼した。

「チエちゃんもこれから部活？」

「はい！」

サトシが空手をやっていたころの後輩でチエという。アカリとは直接繋がりは無かったのだが、チエはサトシを空手選手として尊敬しており、そのサトシの彼女（もはや誰もがそう信じて疑わない）であるアカリは、チエにとつては言うなれば相撲部屋の女将のような存在らしい。素直で良い子なので、アカリも邪険にすることなく接している。

それにしても勿体無い、と学校中の男子はため息を漏らす。ただでさえ熱血体育会系の言動なのに、そのうえ耳かけショートボブという短い髪型では、どうしたって中性的な印象を与えられがちだが、それでも彼女はどう見てもその辺のアイドルより可愛いらしかった。目はくりくりと輝き、背丈も小さくまさに妹系アイドルといった風体だ。これで普通の女子〇生らしく振舞ってくれたら……：そう残念がる男子生徒は多い。鉄面皮サイボーグ美女と揶揄されるアカリを並べて、二大ガツカリ女子と評されることも少なくなない。

「師匠はもうお帰りっすか？」

サトシのことだ。アカリは最近になって、ようやく笑いかみ締めずにその呼び名に反応することができるようになった。サトシ本人は今でも嫌がってい

る。アカリも「姉御」と呼ばれそうになったが、それは彼女が全力で阻止した。

「うん。もうあたし達もそろそろ受験だからね。勉強もしないと」

「そうですか」

気のせいか、チエの表情に陰りが見える。どうしたの？　と言外に伺うよう首を傾げた。チエは気まずそうにアカリの顔を見上げる。

「またいつか、稽古つけてもらいたいです」

「……あー」

気まずそうに頬を掻く。

「そうだね。あたしからも言うておくよ」

その言葉にチエは満面の笑顔を浮かべると、また丁寧に一礼して去っていくのをアカリを見送り、再び足を剣道場へと向けた。

誰もいない道場にて正座して心を落ち着ける。自らの人生において、何か大きなことに挑戦する時はいつもこうしてきた。しかしどれだけ集中しようとしても、雑念や邪念が頭を蝕む。

いや、そもそもその目的が雑念そのものなのか、と自嘲的にため息をついた。

「あれ？　今日って練習あったっけ？」

振り返らずともわかる。やや間の抜けた、しかしそれでいて奥深くに鋭さを隠す声。剣道部に顧問はいるものの剣道経験が全く無いため、外部の町道場からコーチをお願いしている師範だ。

「いえ。自主練です」

軽めの練習というのは嘘だった。彼女はまずここで心を落ち着かせたかったのだ。

「真面目だねえアカリちゃんは」

真面目。その言葉が気まづく肩に押し掛かる。それを払拭するが為に、正直に自身の未熟さを告白する。

「ところがあたしは真面目ではないみたいです」

「そうなの？」

「今日は何日ですか？」

「二月……十四日だけ？」

「そうです。あたしは今日……」

一旦言葉を切って、背筋を伸ばしなおすと、

「ずっと好きだった幼馴染に告白します」と宣言するように口にした。



「おー」

師範は感心するように拍手する。

「そのために、道場で精神統一を図っているのです。雑念のために、雑念を払うという矛盾に陥っています」

「へー」

「……あの、叱ったりは？」

「いや、別に。いいんじゃない？ 人間なもの」

「弓枝先生ってわりと俗っぽいですね」

なんとなく予想はできていた弓枝の反応に肩の力が抜ける。

「雑念は無理に排除しようとするんじゃないやなくて、それを自らの血肉としたうえで剣に集中すべし！ ってお爺ちゃんが言った。ほら。寝れない時に寝よう寝ようと焦ったら余計寝れないでしょ。みたいな？」

呑気そうな笑顔を浮かべる弓枝を見て、その言葉に説得力を感じてしまったのもおかしいものだ。アカリは弓枝と何度も手合わせをしているが、全国大会出場経験のある彼女をもってしても、遥か上空の腕の持ち主である。一体どれほどの力量の差があるのかわからないほどの、いわゆる達人と表現しても差し

支えない領域に踏み込んだ人間の言葉。

「しかしここでも幼馴染か。結構多いもんだね。」

「ここでも？」

「以前の教え子にも幼馴染でくっついた子達がいてさ」

自分とは関係ないはずなのに、同じ境遇で上手くいっている人たちが居ると思うと心が温かくなる。

「その人たちは今も？」

「去年結婚したよ。デキ婚だけどね。真面目で大人しいカップルだったんだけどね。アカリちゃんも気をつけなよ。男は皆狼だよ。」

頬が微かに紅潮するも、サトシもそれくらい大胆になってくれないものか、と考える程度の余裕はある。

「ところで弓枝先生は何しに学校へ？」

照れ隠しのつもりで話題を逸らした。先生という呼称はあくまで儀礼的なものであって、町道場の師範である彼女は当然学校の教員ではない。

「ああ、来年度からの契約についてね」

「引き続き指導して頂けるんですか？」

「まあ多分ね」

アカリはその報告を素直に喜んだ。弓枝の人柄はもちろん好感が持っていたし、なにより剣道家として学ぶことが多かった。

「でもささ、あの山本とかいう体育教師マジ苦手だわ。もう視線があからさまにセクハラなんだけど」

そう顔をしかめる弓枝に対してアカリは苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

体育教師の山本。女子の間でも有名なセクハラ教師。女子バレー部の顧問だがバレー部の友人も何度か指導と称してお尻や太もを触られたことがあるらしい。

「ま、そんな事はどうでもいいか。あたしはもう帰るから、戸締りとかはよろしくね」

「はい。お疲れ様でした」

「告白頑張んなよ。決戦は金曜日ってね」

アカリは不思議そうに首を傾げる。

「今日は木曜ですよ？」

「世知辛いわ」

笑いながら帰っていく師範の背中を不思議そうに眺める。

その後も武道場でしばらく瞑想に耽る。他人に話すとそれだけで案外すつきりするものだ。胸の奥の風通りがよくなった気がした。

「さあ。そろそろ行こうか」

少し肩が軽くなった。立ち上がるうとしたその刹那、「泰然自若、とはどういう意味なのだ？」と背後から声が掛かる。身を翻すように振り返り、同時に竹刀を中段に構える。不測の事態に対するその俊敏な所作は、彼女の天性と弛まぬ研鑽を物語っている。

いつの間にか、道場の中にスーツ姿の若い男が立っていた。距離にして五歩。背筋が凍る。アカリにはスポーツとしての一端とはいえ、武芸を嗜んでいるという自負があった。有り得ない。足音すら感じさせずにここまで接近を許した自分ではなく、そんな芸当をやったのけた相手に恐怖を覚えた。男は道場の壁を見上げている。その視線の先にある掛け軸の一つを読んだのであろう。

「……平常心を保つとか、そういう意味です」

こめかみを流れる嫌な汗を無視してそう答えられたのは、その男からは少なくとも害意や敵意は感じられなかったから。そう思ったのも束の間、男が顔を下ろし、アカリと視線を合わすと、彼女はまた別の違和感を覚える。その男は、あまりに特徴が無かった。目も、鼻も、口も、背丈も、肩幅も、髪型も、全てがあまりに平均的すぎる。整っているわけではない。けして眉目秀丽とはいえない。ただただ、不自然なほどに、普通だった。不気味と思えるほどに。二十代後半の日本人男性を全て鍋に入れて煮込んで出来たような容姿。

「そうか。ありがとう」

男は礼を言うと、警戒心を露にするアカリに対して、落胆するように肩を落とした。

「どうやら私はまた失敗をしてしまったようだ。ああどうか警戒心を緩めてほしい」

男は自分が無害であると証明するように両手を上げる。しかしアカリは構えを解かない。その声。その表情。全てに感情が伴っていない。まるで仮面から人口音声が流れているかのよう。

「この学校の関係者ですか？」

答えのわかりきった質問をして、気持ちを落ち着かせる時間を稼ぐ。

「いや、違う」

悪びれる様子もなく即答。

「まいったな。未だに君達の心の機微を理解することが出来ない。だからこそ改良版が投下されたのだが……これは落胆、という感情だろうか。もしくは自己嫌悪に近いのかもしれない。そもそも邂逅から説明に至るまでの過程が最も困難であるはずなのに、その箇所に対して細かな対処法が無いのは聊か不親切と言わざるを得ない。上は説明から信頼の過程が重要だと考えているようだがそれは間違っている」

長い独り言を呟くが、その言葉には一切の抑揚が感じられなかった。その異様な様子を目の当たりにして、これはいよいよ覚悟を決めなければならぬ、とアカリは意識を目の前の男に凝縮させる。

茫然自若。

皮肉なことに、男が問うた言葉が頭によぎる。意識して息をゆっくりと吐いていく。やがて不安や恐怖が消える。

視線は対峙する男へ。しかし心は周囲に溶かしていく。手のひらに感じる竹

刀の感触と、足裏で踏みしめる床の感触が繋がる。見るともなく全体を見る。目を待ちて以て明と為せば、見る所の者少なし。身体はただの器。意識の集中と同時に拡散。それは空間との同化。誰に教わるでもなく、彼女はその術を身体に宿していた。全身をリーダーと化したアカリの後の先の太刀は、時折ではあるが弓枝の背中を粟立たせる領域に達しようとしている。

男は「ふむ」と相変わらず感情を浮かべないまま頷くと、「やはり逸材だな」と感心したように呟いた。一歩下がると、「竹刀を降ろしてくれ。私には君と敵対する意思は無い」とやはり一切の抑揚を感じない口調でそう言った。

アカリは反応しない。それは最早、まるで一本の竹刀。刀は語らず、ただ斬るのみ。彼女のそんな静かな気迫が乱れたのは、男が口にした名前。

「私は田中サトシを救いに来た」

自意識が溶け込むほどの集中が、いとも簡単に瓦解した。剣先を下ろす。

「サトシの知人ですか？」

しかしその口調には棘が残ったままだ。警戒は緩めない。

「いや。そういうわけではない。単刀直入に言おう。このままだと、彼は近いうちに死ぬ。そして彼を救えるのは、君だけだ」

アカリはつい笑ってしまった。男の世迷言に対してではない。冗談を言っているように思えない、と思ってしまった自分に対する嘲笑。

(馬鹿馬鹿しい)

「出て行って下さい」

「ふむ。今回も第一印象としては最悪の部類に入るのだろうか。どうにか上手く警戒されずに接触できる方法を模索せねばな」

男は誰に言うでもなくそう呟くと、音もなく道場から出て行った。完全に姿を消すまで彼女は男の背中から目を背けない。道場に静けさが戻る。しかし彼女の背中を流れる嫌な汗は止まらない。まるで物の怪に化かされたかのよう。彼女はその場に腰を下ろす。

「なんだ神崎。具合が悪いのか？」

間が良いのか悪いのか、その直後に体育の山本が道場の前を通りかかった。山本は道場に入ってこようとす。先ほどの弓枝との話を思い出すと、ただでさえ煙に包まれた嫌悪感の中、さらに背中が粟立つ。

「いえ。大丈夫です」

何も問題は無いとばかりに気丈に振舞うと、山本の表情には残念そうな色が



浮かんだ。丸い輪郭の底に生える青苔のような髭の剃り跡を撫でながら、

「なんだったら保健室に連れてくぞ？」と口にする。

一見その口調は優しげではあるが、その下心は露骨なまでに伝わる。アカリはこみ上げる悪寒を喉元でやり過ごし話題を逸らす。

「あの、さつき学校関係者じゃない人が居ましたけど」

「なに？ 不審者ってことか？ いつどこで？」

「先生がここに顔を出す直前です。道場にいました」

アカリのその言葉に山本は首を傾げる。

「んん？ この入り口から出て行ったのか？ 俺が来る直前に？」

「はい」

「神崎。お前やっぱりどこか悪いんじゃないか？道場前の渡り廊下には誰も居なかつたぞ」

そんな、と口に出しそうになるが、それを強引に押し込めた。何かの間違いだろう。丁度死角になっていたか、余所見をしていたに違いない。彼女はそう考え、この件はすぐに忘れることにした。これから愛を告白するというのに、なんだかケチをつけられたようで腹が立ったが、ただでさえ険しいと言われが

ちな顔つき。こんな時くらいは女の子らしく振舞おうと、トイレに寄ると珍しく薄いルージユを引いた。

去年の誕生日、女友達数人がお金を出し合ってプレゼントしてくれたものだ。アカリは自分でそんなもの買ったことが無かった。鏡の中の自分の唇を見て、少し面映ゆい気持ちに駆られる。

(あたし、本当にこらからサトシに告白するんだ)

胸を押さえ、何度か深呼吸をすると、先ほど会った不審者のことなど忘れて、待ち合わせ場所へと足を運んだ。途中何度か立ち止まり、震える足を叱責した。やがてサトシと待ち合わせしたお互いの家の中間にある小さな公園につく。

陽が暮れ始めた幼児用の公園には誰もいない。よく二人で城を作っていた砂場を、ベンチに腰を掛けて眺める。上級生に城を壊されて泣いてしまった自分の姿と、その上級生に挑みかかって返り討ちになったサトシを思い出した。自分の涙の為に戦ってくれたのは嬉しいが、幼稚園児が小学校高学年に勝てるわけがない。その光景は、今考えると滑稽で笑ってしまう。でも当時は、その後姿に幼稚園児ながらに胸をときめかせていた。

そういえば、とアカリは思い返す。サトシが空手を習い始めたのはその直後

だったこと、あれ以来自分が泣いていないこと。クラスの飼い猫が死んだ時も、泣けなかった。それをクラスメイトに責められた時も泣けなかった。でもサトシに庇ってもらった時は、ちよつと泣きそうになった。次に泣くことがあれば、それはどんな時だろうか。この告白が上手くいったら泣けるだろうか。その涙はきつと幸せの味がするに違いない。

まるで街中から人が消えてしまったかのように、夕焼けが照らす公園の中には静寂が広がっている。通りに面してはいるものの、中途半端な時間で人通りはない。アカリは隣に置いた紙袋を上から覗き込む。可愛く包装されたチョコレートが見えた。はあ、と溜息をつく。どうしてこんなに時間が掛かってしまったのだろう。今まできちんと告白しようとしたことは何度もあった。でもその覚悟を決めた時に限って急用が入ったりして、お互いのちよつとした都合が付かなかつたりして、氣勢を削がれてはの繰り返し。それは何もアカリ側からの話だけではない。夜中にサトシから呼び出された時もあった。自意識過剰ではなく、電話では何か決意を感じるような声だったから、それはきつとサトシからの告白だったに違いない、とアカリは考えた。

しかしその晩サトシは交通事故にあつて、空手を諦めることになる。そこま

で大きな事故は他にはないが、大なり小なり、二人が恋人になろうと決意をすると、決まって何者かが彼らの運命に介入しているかのようになり邪魔が入った。それもサトシの不幸体質の所為なのだろうか。そんな馬鹿な考えが一瞬によぎるが、彼女は頭を振ってその邪推を打ち消した。

「悪い、待った？」

顔を上げると夕日を背に私服姿のサトシが公園の入り口に立っていた。アカリは首を横に振りながら立ち上がる。

「何だよ話って」

いざその瞬間になると、もし振られたら、と不安に駆られる。全て自分の思いがりで、サトシは何にも思っていないのではないか。そう思うと、「好きでした」の一言が喉の途中でつかえる。

変な間が空いてしまった。とりあえず、押し付けるように紙袋を渡した。

「きよ、きよ、今日、バレンタイン、だから」

もう先ほど出会った怪しい男のことなど頭に無い。ただの恋する挙動不審ないち乙女だ。

「おお、ありがとう、今年はアカリからしか貰わなかったな」

そう言いながら受け取るサトシに唇を尖らす。

「嘘。同じクラスの子に貰ってたでしょ」

「それは断った」

「なんで？ 酷いなあ」

そう言いながらも、彼女は内心安堵を覚えるが、断られた女の子のことを思い、そんな自分に少し嫌気が差す。

「なんか、アカリに悪いかなって」

「別に付き合ってるわけじゃないじゃん」

何故こんな事を言ってしまうのだろう。可愛げがないにも程があると更に自己嫌悪。

「今食べて良い？」

サトシは紙袋に視線を落として、既に包装を解こうとしている。

「いいけど。今からバイト？」

「ああ」

丁寧に包装を解くと、そのハート型の手作りチョコを頬ばる。毎年同じ形を送り続けている。

サトシはもう一口齧ると、「あのさ」と視線を横に向けて、「ていうか、付き合わない？」と淡々と口にした。

「……別に、いいけど」

アカリも目を逸らして、淡々と答えた。何年もずっと想いあっていて、ようやく恋人関係になれるという瞬間がこれである。あまりに虚をつかれた告白に、嬉しさよりも混乱で頭の中が沸騰しそうになる。

ずるい。

アカリはそう思った。

「ずっと前から、好きだったし」

頭を掻きながらサトシはどこか申し訳なさそうにそう言った。

「……うん」

ずるいよそんなの。

自分だってちゃんと気持ち伝えたい。しかし彼女の口から出たのはその一言。何でもないような様子を振舞っているが、実のところ心臓は爆発しそうなほど鼓動を刻んでいる。立っているのが精一杯だ。

「いつから??」

違う。そんな事はどうでもいい。あたしもずっと好きだった。そう言いたいはずなのに、素直に言葉に出来ない。もっとあっさりやれると思っていた。朝の挨拶と同じ感覚で想いを伝えられると思っていたのに、いざ実践となると、走ってこの場を逃げ出したくなるほどの重圧。

「わかんねーよそんなの。昔からじゃねーの」

「あ、そう」

あまりに可愛げの無い自分に腹が立つ。しかしどうにも出来ない。いつも見ているサトシの目が見れない。アカリは目を逸らしたまま、「明日さ、海の近くの神社行かない？」と、そう誘うのが精一杯。

「別にいいけど」

「うん」

「あ、それじゃ俺バイト行くから」

「うん」

（ほら、早く言わないと。「あたしもずっと好きだった」って）

そう思いながらも、彼女はその場を立ち去るサトシの背中を黙って見つめていた。あまりに拍子抜けするような、念願の恋人関係への進展。しかしその高

揚感は現実味が感じられないほど気持ちを浮き足立たせる。何度も先ほどのやりとりを心の中で反芻する。やっと、恋人になれた。ふと頬に手をやると、口端が痙攣しながら釣りがっていた。これでは完全に不審者だ。

どれだけの時間そこで突っ立っていたのだろう。いつの間にか夕陽はまさに落日を迎えようとしていた。

「帰らなきゃ」

幸福に満ちあふれた独り言を呟き、足を進める彼女の背中に声が掛かる。

抑揚の無い声。

「なぜ海の神社を選んだ？」

ゆっくりと振り返り、露骨に舌打ちをする。生まれてこの方初めてといっていいほどの多幸感の余韻を邪魔されたアカリは、その声の主に純然たる敵意を向ける。

「あんた一体なんなの？ ストーカー？」

数時間前に道場で見た、まさに最大公約を体現した顔つきを睨みつける。しかもまたいつの間にか背後を取られた。それだけではない。神社デートの下りを知っているということは、先ほどのサトシとの会話も聞かれていたというこ



とだ。この公園には身を隠す遊具や巨木など存在しない。

（一体どうやって？）

沸き上がる当然の疑問。しかしそんな事よりも怒りが上回る。男はやはり敵意は無いと表明するように両手の平をアカリに向けた。

「気に障ったのならすまない。ただ世間話をしようと思ったただけだ」

「一体何者なの？　って聞いてるんだけど？」

「ふむ」

苛立ちを隠そうともしない彼女に臆することもなく、男は胸ポケットからコピー紙を取り出し、それを広げて目を通す。

「よしわかった。ではこうしよう。好きな野球チームはどこだ？」

アカリは竹刀袋から竹刀を抜刀した。

「まいったな。怒らせるつもりは無かったのだが。このマニュアルは時々役に立たない」

コピー紙を胸ポケットに仕舞いながら呟く。しかしその表情からはどこにもまいった様子など見つからない。竹刀の切っ先を男の顔に向ける。普段のアカリならいくら不審者が相手といえど、そのような短慮な行動は慎んでいただろ

う。未熟とはいえ、武道の本懐は理解しているつもりだった。しかし目の前の男は纏う雰囲気はあまりに異様すぎた。彼女の本能は警戒を促し続ける。

「もう一度聞いわ。あんた、何者？」

男はふう、と息をつく、

「わかった。単刀直入にいこう。他人と円滑に知人となるには、私にはどうも決定的に欠如している能力があるらしい。君で担当は数十人目だが、未だに出会いの過程を上手くこなせた例が無い。しかし上からはアップデートの予定は無いと言われている。我々『代理人』にも多様性を求めているらしい」

「単刀直入の意味知ってる？」

「ああすまない。では、神崎アカリ。君は田中サトシを救う為に、魔法少女にならなければならぬ」

アカリは切っ先を下げると、溜息をついて竹刀を袋に戻す。

「救急車呼んであげよっか？」

「その必要はない」

「じゃあ警察ね」

「警察では田中サトシは救えない」

「あんたを捕まえてもらうのよ」

「私が捕縛されれば田中サトシは救えなくなる」

「ああそう。それは大変」

「何より普通の人間は私を捕縛する技術を有していない」

「大丈夫よ。日本の警察は優秀だから」

アカリはうんざりしながら彼に背を向けて歩き出す。身の危険を感じないでもないが、直接手を出してくる気配は無い。相手にするだけ無駄だ。そう思い公園の出口に足を向けた。その視線の先にはありえないものが映る。先ほどまで顔をつき合わせて話していた男に背を向けた、はずなのに、その先には、またその顔があった。

もう一度振り返る。元居た場所には誰も居ない。おそろおそろ、公園の出口に再び顔を向ける。男は無表情のまま、ただそこに立っている。まるで廃棄されたマネキンのよう。

再び抜刀しながら「あんたは魔法使いつてわけ？」なんとか恐怖を押し殺した声で問う。

「そう解釈してもらって構わない」

中段に構えながら状況を整理する。

(手品? いや違う)

明らかに瞬間移動したとか思えない。なにより初対面の時から感じる異様な雰囲気。アカリの男を見る目は頭のおかしい不審者から、得体の知れない物の怪へと変わった。

「ふむ。人目につく可能性がある場所での魔術の行使は奨励されていないが、やはり説得の手段としては非常に有効だな。百聞は一見にしかず、ということか。マニユアルには極力控えるようにと記された方法論ではあるが」

アカリは黙ったまま男から視線を逸らさない。

「先ほども感心したが、素晴らしい集中力だ。ただ怯えるわけでも、自暴自棄になるでもない。現実を受け入れられる柔軟性を持っている。君はきっと良い魔法少女になれるだろう。どうやら君には千の言葉よりも、一つでも実例を示すほうが良さそうだ。私が行使できる魔術はあくまで『代理人』として、君たちを補助するためのものに限られるが、この程度のことではできる」

彼女は再び自らの正気を疑う光景を目にする。男は口を閉じると、その場から姿を消した。突然、何の前触れもなく。まるで世界が彼の存在を忘れてしま

ったかのよう。しかしアカリは驚愕しながらも切っ先の向きをそのまま変えない。視線も前を捉えたままだ。消えた男が、一歩も動いていないことを確信している。男が再び、やはり何の予兆もなく、同じ場所に現れる。

「驚くべき逸材だな君は。解脱はおろか、契約すら行われていないのに、自然と君の属性である『林』の特性を習得している。それも実体の方だ。これは私の担当してきた少女では前例が無い。さて、とにかくだ。これで私の言葉に耳を貸す気にはなれたか？」

「……聞くだけ聞いてあげる」

「結構。では今度こそ出来る限り手短に説明しよう。それほど時間的な猶予は無い。田中サトシは昔から不運が集中する人間だった。違うか？ いや返事は必要無い。わかりきっていることだ。その原因は、カルマと呼ばれる『あちら側』の世界に発生する、君たちが言う所の妖怪や悪魔のような存在だ。本来は存在というよりは現象と表現したほうが近いのだが、ここでは細かい説明は省こう。田中サトシはそれらを引き寄せる体質の人間だ。カルマは普通の人間には見えないし触ることも出来ない。彼らは常に『あちら側』の存在だからだ。実体を持たず、霊体でしか存在しない。そして霊体だけの存在にカルマに干渉

するためには、同じく霊体だけの存在に変異するしかない。それを解脱と私たちは呼んでいる。変身と言っても良い。カルマと同じく仏教哲学の用語だが、私たちは自身は無宗教だ。呼び名が無いと不便ということで便宜的に付けられただけの呼称なので、意味はさほど無い。

さて、人間には因果というものが付き纏っている。それは世界の根源と管の管から因果が漏れ出てしまっている人間がいる。カルマは漏れ出た因果を主食とする。地面に落ちた飴に群がる蟻を想像してもらえばいい。カルマはそういうった人間の因果そのものを食いつくそうとする。その結果は、死だ。

しかし対抗手段がないわけではない。先ほど述べたように、霊体だけの存在のカルマを排除するならば、霊体だけの存在になるしかない。君達でいうところの幽体離脱だと思ってもらっていい。それを解脱であり、変身ともいう。そして解脱を行い、霊体としてカルマを排除する者達を、私達は魔法少女と呼称している」

息継ぎすら感じさせない滑らかさで、淡々と説明を終える。

「何か質問は？」

あまりの与太話に頭がくらくらと揺れる。しかしそれでもアカリは鼻で笑って男の横を通り過ぎ、そして何事もなかったかのように帰宅しようとは思えなかった。話の途中、男は見せびらかすように手の平の上に、青い炎をようなものを出したり消したりを繰り返していた。ごくりと喉を鳴らす。全てを、はいそうですか、と受け入れることは出来ない。しかし、やはり同様に、全てをただの狂言と受け流すことも出来ない。男がこの短時間で立て続けに示した奇異な行動は、もはやトリックの一言では片付けられない。

いつの間にか陽は完全に落ちていた。公園の照明が点滅しながら感情のない男の顔を照らす。

「なんであたしなの？」

なんとか声を絞りだす。

「当然の質問だな。田中サトシのような存在を私達は カルマ憑きと呼んでいる。そして魔法少女となるには四つの条件が必要となる。一つ。カルマ憑きが恋心を抱いている女性であること。二つ。またその女性も、カルマ憑きに恋心を抱いていること。これは因果律と縁の結びつきによる問題だ。三つ。妊娠中でないこと」

その言葉の意味はよくわからなかったが、それでも言わんとすることを察することはできた。切つても切れないほど結びついた、強く想いあう二人。自分達の関係がそう認められた気がして嬉しさすら感じた。しかし最後の言葉が、彼女のそんな幸福な余韻をぶち壊す

「そして四つ。我々『代理人』と性行為を行うこと」

「……は？」

「性行為は『契約』時の一度きりで大丈夫だ。一度魔法少女として『契約』してしまえば、あとは前述の条件を覆さないかぎり、君はいつでも解脱を行うことができる」

アカリは啞然とその言葉の意味を考えるが、しかしそれは咀嚼されることなく拒絶された。

「サトシを守るために、あんたとHしないとイケないってこと？」

「そうだ」

何の銜いもなく答える。

「……馬鹿じゃないの」

彼女はげんなりした表情で呟くと、そのままゆっくりと歩を進め公園を出た。



男は微動だにせず、そんな彼女の背中を見送った。

暫く歩くと一度振り返った。街灯が灯しだした暮れ時の夕闇に公園は消えていく。あの男の姿はもう見えない。そんな馬鹿な話があるものか。そもそも真面目に聞いていた自分にも腹が立つ。八つ当たりのように地面を踏みつけながら歩くと家にはすぐに着いた。

「ようやくサトシと結ばれたつてのに冷や水掛けないでよね」  
ぶつくさと唇を尖らせながら玄関を開ける。

「ただいまー」

帰宅の挨拶をすると奥からお母さんの返事が聞こえてきた。その声に釣られるよう台所に向かう。

お母さんはあたしの顔を見るなりにやりと笑った。我が母ながら不敵な笑みだと感心する。どこか不思議な目力があるのだ。この人は。

「どうした？」

「別に」

常に機嫌が悪そうに見える事で定評のあるあたしの顔から、細かい感情の機

微を察してくれるのはお母さんとサトシくらいのものだ。

お母さんとあたしの顔つきは似ているが、周りに与える印象は全く異なる。誰に対しても分け隔て無く、おおらかで頼れる雰囲気醸し出している。早くにあたしを産んだのでまだまだ若いのに町内会の重要職などを頼まれたりするらしい。サトシ以外には露骨に壁を作ってしまうあたしとは大違いだ。ざっくばらんとした親しみやすい性格でもありやたらと周囲に人が集まる。こういうのをカリスマとでも言うのだろうか。

「大方サトシ君と喧嘩でもしたのだろうか」

「そんなんじゃないし」

「いや、その顔は……ふふ。なるほどな。ようやく交際にかぎつけたのか」

「ち、違うし。そもそもお母さんには関係無いから」

照れ隠しについつい嘘をついてしまう。周りからは大人びていると評されがちだがとんでもない。普段は確かに落ち着いている。ゴキブリが出ようが地震が起きようが慌てることはない。しかしサトシの事となると途端に感情を制御出来なくなる。要はまだまだ子供なのだろう。お母さんはそんなあたしを流し目で一瞥しながら言った。

「アカリは嘘をつくとすぐに耳たぶが赤くなる」

「え！？ 嘘！？」

慌てて耳を隠す。

「嘘だよ。こんなカマ掛け本気にするとはな。我が子ながら可愛いなお前は」  
彼女の前ではあたしも文字通り子供扱いされる。親子なのだから当然なのだ  
けど。

「……お父さんはこんな意地悪な人のどこが良かったんだか」

ふくれっ面でせめてもの意趣返しをするが彼女には全く通用しない。

「そこはそれ。私の猛攻が突ったのさ」

ふふんと得意気に鼻を鳴らした。尊大な程胸を張って笑うのがよく似合う人だ。いくら顔立ちが似ていようと、どこか陰気で威圧的な空気を周囲に撒き散らすあたりではこうはなれないだろう。

「へえ。お母さんからだったんだ」

エプロンを着けながら興味深く相づちを打つ。

「ああ。初恋もお父さんだったからな。そのジャガイモ剥いてくれ」

「ん」

炊事の手伝い程度は日常になっている。強制された事は一度もない。きつかけは小学生位の頃だろうか。サトシが将来結婚するなら料理が出来る子の方が良いと言っていたのを人づてに聞いたからだ。勿論そんな幼少の頃の異性に関する言葉など、その場の空気や勢いで発せられたに違いないが、それでもあたしは料理の技術を磨くことに余念が無い。

いや、それだけではないなと思ひ直した。あたしが小学生の頃はお母さんも仕事に忙しかったようで、少しでも力になりたいと思つた事も契機の一つだったか。編み物や裁縫なども彼女に教えてもらっていたのだった。

「何をにやにやしてるんだ？」

「別に。昔のこと思ひだしてたの。ねえ。お父さんって昔はどうだったの？」  
「中々に手強かった。押しに押しして漸く付き合えたんだ」

親の恋人時代の話を聞くのはやはりむず痒いものだ。それでも興味が無いといえば嘘になる。

「それからお父さんだけ？」

「ああそうだ。アカリもきつとこれから苦労するぞ。どうやら私に似て朴念仁が好みのようなだからな。サトシ君は中々手強そうだ」

「そこも格好良いの」

思わず本音を漏らしてしまう。途端に顔が熱くなった。隣で肉の下拵えをしているお母さんはくつくつと笑った。

「そういうところは私にそっくりだな」

「……何が？」

「好きな人の事となるでしょうもなく愚直になる」

「……別に」

どうにも決まりが悪くて顔が引きつる。仕方が無いので料理に集中する。どちらにせよ包丁を手にするのだから雑念は消えるのだ。誤解を招きそうでも口には出せないが。あたしは刃物が好きだ。竹刀も好きだがやはり真剣もいつか所有してみたい。研ぎ澄まされた刀身が放つ鋭い光彩は思わず溜息が漏れる。存在理由はただ一つ。斬るために生まれた道具。余計な意思や道理は不要とばかりにそぎ落とされている。あたしもそうありたい。無駄の無い洗練されきった一太刀の閃光こそが、あたしの求める生き方そのものだ。上手く人付き合いが出来ないのもそんな哲学が影響しているのだろうか。心のどこかでサトシさえ傍にいてくれれば良いと思っっている。お母さんは見本の一つだ。余分な

装飾など一切取り繕っていないのに、それでいて華やかな色気すら感じる。弓枝先生もそうだ。二人に共通するのは余裕だろう。あたしにはそれが不足している。経験でどうにかなるもののだろうか。せめてサトシの前でくらは素直でありたい。この気持ちを伝える程度で良い。明日伝えたい。あたしもずっと好きだった、と。

ふと気がつくと隣のお母さんが神妙な顔つきでＴＶの画面に釘付けになっていた。その事故は全国ネットのニュースで速報が流れるほどに大規模なものだった。

国道を走るガソリンを積んだタンクローリーが横転し、穴が開いたタンクに引火。爆発。奇跡的に運転手は無傷で、その他にもけが人は居なかった。ただし、『地元の男子校生が意識不明で病院に搬送された事を除いては』とＴＶニュースは報道していた。

液晶パネルに映っているのは、サトシがバイトしているファミレスの近くの国道だった。

「……嘘でしょ」

啞然とそう呟くと包丁を置いてエプロンを脱ぎ捨て走った。後ろでお母さん

が呼び止める声が聞こえていたが、あたしは一心不乱に夜中の街を走り抜けた。予感があった。確信といってもいい。あの男は、嘘をついているわけではなかったと。

街で一番大きい病院には、すでにマスコミの車が集まりつつあった。人ごみを掻き分け中に入ろうとする。記者達は入り口で病院関係者に進入を禁止されていたが、事故の被害者の知人かもしれないと伝えると中に入ることを許可された。

集中治療室の前には、見覚えのある顔が二つ。サトシの父と、そしてユーキ君だった。

「おじさん……。ユーキ君……」

二人とも突然の事故にわけがわからないといった表情を浮かべている。悲しみでも憤りでもない。ただただ呆然としている。その光景が胸を叩く。聞くのが怖い。しかし聞かないわけにはいかない。

「……サトシは？」

「……外傷は無い。しかし頭を打ったらしくて、意識が戻らない。……非常に危険な状態らしい」

サトシの父がそう口にした瞬間、あたしの頬を熱い何かが伝った。十数年ぶりの涙は嬉し涙ではなかった。

集中治療室の前でユーキ君と肩を並べてソファに腰掛けた。サトシのお父さんは親類からの電話で席を外している。ユーキ君は狐に化かされたかのような表情のまま天井を眺めている。あたしは両手で顔を覆い、十数年貯めた涙を流しきると、「今日、告白してもらった」と呟いた。

ユーキ君はそんなあたしを一瞥すると、「そっか……」とだけ口にする。また天井に視線を戻した。

「ずっと前から相談されてたからな。そうか。あいつ、漸く言えたんだ」

そう漏らすユーキ君の目尻から涙が零れた。あたしは唇を嚙むと勢い良く立ち上がった。早足でその場を去る。ユーキ君はわけがわからなかっただろう。気が触れたのかと思われたかもしれない。

病院の裏口から駐車場に出る。裏山の麓の雑木林に囲まれた空間。人目は無いし、気配も無い。しかし躊躇無く叫んだ。夜の空気を切り裂くのはあたしの激情。

「出て来いっ！ いるんでしょっ！？」



街灯が照らす空間に、ゆらりと光が波打つ。忽然と男が現れた。予想通りあたしを見つめるその視線に感情は無い。

一度大きく深呼吸をすると「サトシはどうなるの？」と力強く尋ねた。その目元や鼻は赤いままだっただろう。それでもあたしは一切の弱々しきを見せないよう努めた。あたしがどれほどの覚悟と決意を胸にその問いをしたのか。そんな事を微塵も考慮しない淡々とした返答。

「明朝には命を落とすだろう」

ぞくりとした悪寒が背中を襲う。その場に跪きたいほどの恐怖。しかし歯を食いしばりなんとか堪える。すると男が無言で手を差し出した。それを怪訝な表情で見つめる。

「握ってくれ」

その手の平にはうっすらと幾何学模様が光っていた。あたしは藁にもすがる気持ちでそれを掴む。

「私達『代理人』はカルマに干渉が出来ない。解脱出来ないからだ。しかし普通の人間とは違い感知はできる。こうすれば視界を共有できる。ほら。あそこだ。田中サトシの病室の窓に見えるだろう？」

そう促され顔を上げた。

「なっ、に……あれ」

思わず漏れ出た恐怖に怯えた。軽トラックほどはある巨大な蜘蛛が病院の窓に張り付いている。それは全身にうっすらと靄のような影を纏い、病室から黄色い煙のようなものを吸い上げていた。

「因果だ。吸われるほどに、不幸が訪れる」

あまりに非現実的な光景に絶句する。黄色い煙の流れが止まるとカルマは屋上へと上がりそのまま姿を消した。男が手を離すとあたしは地面にへたり込む。  
「……うそ」

怪物が怖かったわけではない。この男の話を疑う余地がいよいよ無くなったから。それは即ち、サトシの死を意味する。それが何より怖かった。

「あれがカルマだ」

「あれが、サトシを？」

力無く地面を見つめながらそう呟く。

「そっだ」

ちりちりと照明が点滅する音が聞こえた。

服の上から胸をぎゅっと掴み男を見上げる。

「あたしに、救えるの？」

己の瞳に悲痛な覚悟が宿るのを感じた。

「可能だ」

男が即答してくれたのが唯一の救いだった。

一度病室の前まで戻り、二人に軽く挨拶をする。いまだ呆然としたままの二人に背を向けながら、「大丈夫だから。あたしが、助けてみせるから」と心の中で力強く呟いた。騒ぐマスコミを避けるようにまた裏口から出る。男はそこで待っていた。

「お待ちせ」

「まだもう少しだけ時間に猶予はある。カルマ達は総じて小食かつそれぞれのカルマ憑きに対しては単体でしか現れない。先ほどの蜘蛛が腹を空かし再び田中サトシに近寄ろうとするのは、恐らく夜明け間近と思われる」

「どうしてそんな事までわかるの？ それもあんたの魔法？」

気丈に振舞ってはいるが、先程目にした光景と、これから自分がしなければ

いけない事が脳裏をよぎり、その声には抑えきれない揺らぎがあった。しかし彼女は、それを全て強引に飲み込む。まだ誰かと喋っていたほうが気が楽だと言わんばかりに、普段は口数の少ないアカリが、今は無理やり会話をしようとしている。

「私たちは遥か昔からカルマの排除に関わっている。奴らの習性は膨大な前例からある程度予想をつけることができる。さあ、私との契約はどこで結ぶ？」

「どこって……」

「君の指定する場所で構わない」

そう言われ、彼女は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

(あたし、本当にこいつとHしないといけないんだ。初めてなのに……)

その事実には愕然としながらも、またそうしないとサトシを救えないという現実には背中を押される。

「私の家に来て。ホテルとかは、制服じゃ駄目って聞いたことあるし」

何でもない。こんな事は何でもない。そう自分に言い聞かすよう、出来るだけ淡々と答えた。どちらからともなく肩を並べて歩き出す。

「ねえ？ さっき見たあいつを倒せばサトシは助かるんだよね？」

「とりあえず今は、命の危険は無くなる」

「今は？」

「カルマ憑きに憑いているカルマを全て倒せば万事解決ということだ」

「どれだけいるの？」

「それは個人差がある。多くて十匹。少なくとも五匹といったところだ。出現周期にもばらつきがある。倒した瞬間にまた次のカルマが出現してくる場合もあるし、私知っている限りで最長は、半年の間をあけて出現したカルマもいる。平均的には二週間から一月の間を空けて出現することが多い。しかし確実に言えるのは、一年の間でそのカルマ憑きに憑いているカルマは、必ず全て出現する、という事だ」

「最長で一年、か」

長いようで短い。しかしはっきりと期間や数が示されているのは少し気が楽になった。際限なく戦わされるのは真つ平ごめんだ。そう考えるアカリの目に、ふとコンビニが映る。彼女は一瞬躊躇したが、横を歩く男から気まずそうに顔をそらしながら、

「あんた、ゴム持ってるの？」と不機嫌そうに尋ねた。

「避妊具のことか？ 必要無い」

「いや絶対無理だからね。無しとか」

「そうではない。私達『代理人』には生殖能力が無い。君が私達の精液で妊娠する可能性は完全にゼロだ」

それを聞くと確かに多少は安心した。しかし、「そういう問題じゃない」と彼女は言い切る。

「そう言われても困る。契約時の性交渉を成功させるには二つの条件がある。挿入しながら君がオルガスムに達することと私の精液を君の子宮に入れることとだ」

「はあ！？」

思わず大声で叫ぶ。

「しかし先程も言った通り妊娠の心配は皆無だ。当然病気も無い。私達は厳密には人間ではない。人工的に精製されたホムンクルスだ」

「何それ？ ロボットみたいなものだってこと？」

「そう捉えられても構わない。血肉や内臓は完全に人間のそれと同一だが」「じゃあ何が違うの？」

「魔術の行使が効率良く行えるよう神経と大脳が弄られている。あとは先程述べたように、生殖能力も無い。契約の為に勃起と射精は可能だがな」

「何それ。じゃあやつぱり殆ど人間じゃない」

「どうしても私に抱かれる嫌悪感があるならば、人形に抱かれていると思えば良い」

「う、ぐ」

そんな風に簡単に割り切れるわけがない。隣を歩く男は、異様な雰囲気すら纏っているものの、どこからどう見ても人間なのだ。しかし背に腹は変えられない。彼女はその現実を受け入れながらも、吐き捨てるように呟く。

「でも、あれでしょ？ オルガスムって、イクってやつでしょ？」

「そうだ」

「……あたし、処女なんだけど」

「問題無い」

事も無げに即答をした。

「いやいやいや。無理でしょ。皆超痛いって言ってたし。それとも何？ あんたが魔法でどうにかしてくれる？」

「私達には性的快感を増幅するような魔術は持ち合わせてはいない。しかし痛みを和らげさせる魔術は行使できる。何も心配は要らない。痛みは無いはずだ」「いや痛みが無くて、そんなすぐ感じたたりとかはしないって、その、友達とか、言ってたんですけど……」

徐々に語気が弱弱しくなるアカリの様子などどこ吹く風。

「問題無い。今まで処女の少女を担当したことは何度かあるが、そのいずれも問題なく契約を完遂できた」

それはつまり、今まで何度も処女をイカせてきた、ということ。

彼女は頬を染めながらも、忌々しそうに「自信満々なのね」と吐き捨てた。

「私達『代理人』はその為に作られた」

「あんたの他にも居るの？」

「ああ。この街にももう一人居る。この街は霊穴となっているのか、昔からカルマ憑きが多く生まれる」

「そいつもあんたみたいなの？」

「私みたい、とは？」

「デリカシーが全く無い奴って意味」



「人間味が無いとはよく言われる。実際そういうコンセプトのもと私は精製された。しかしどうにも担当した少女達には不評で、この街に居るもう一人の代理人は、その反省を踏まえた内面となっている」

「まあ、どうでもいいけど。ていうかあんた名前は？話しづらいんだけど」

「六郎だ」

「……名前の由来は聞かないであげるわ」

「手間が省けるのは助かる」

会話が途切れると黙って歩く二人分の足音だけが静かな夜の街に溶けていく。

その静寂は、アカリによって破られた。

「あ—————！」

足を止めると、頭を掻き毟りながら、その場に蹲る。

（嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！　なんで初めてをサトシじゃなくてこんなわけわかんない奴に！）

不意に涙が流れる。久方ぶりの涙が悲しいことばかり。六郎がそんなアカリに声を掛ける。

「私にも君の気持ちは察することが出来る。今まで担当した処女の少女達も、皆同様の葛藤を示していた。しかしこれは、君の最愛の人を守るための行為だ。先程言ったように、人形に抱かれてると思えば良い」

「そういう問題じゃないよお……」

六郎は少なからず驚いた。彼女から漏れ出たあまりに弱々しい声。アカリは何度も八つ当たりのように地面を叩く。

「くそっ、くそっ……馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！　こんな事なら、毎朝起こしに行ってる時、無理やりにもこつちから襲えば良かった。ていうかサトシから襲って来てほしかった。サトシなら何だっしてあげたのに。あたしの全てをあげたかったのに。処女は絶対サトシじゃないと嫌だったのに！　馬鹿。馬鹿馬鹿馬鹿！　アホ！」

彼女は蹲り、頭を両手で抱えながら息を荒げている。すると何かを決意したように、すっと立ち上がる。そして六郎の顔を真っ直ぐ見据えると、

「ごめん。六郎は何も悪くないんだろうけど、一発殴らせて」と真顔で口にした。

「問題ない」

六郎も慣れている、といった様子で返答した。

「うちの家、もうすぐだから」

「そうか」

六郎の鼻には丸めたティッシュが詰め込まれていて、その唇の端々はうっすら血で滲んでいた。

「本当にごめん。五発も殴っちゃって。なんだか止まらなくなっちゃって」

彼女は申し訳なさそうに、右手の拳を摩りながら言った。

「問題ない。それで君の気が少しでも晴れば、契約及びこれからの行動も円滑に進む。それこそが私が真に望むことだ」

「一応確認なんだけどさ、一回だけで良いんだよね？」

「何がだ？」

「だから、その、エッチ」

「契約は一回だけで良い。ちゃんと私が君の子宮に射精をして、そして君がオルガスムに達すればの話だが」

(あんまり、そうあげすけに子宮とか射精とか言わないで欲しいんだけど……)

彼女は気まずそうに顔を背ける。しかしその言葉に違和感を覚える。

「ん？ 契約『は』？ 『は』ってどういうこと？」

「契約後に君は解脱してカルマと戦うことになる。それを何度も繰り返すことで魔力を消耗するが、それを補給する手段は、やはり性行為だ」

「なに、それ……それは絶対必要なの？」

「そうとも限らない。魔法少女の特性や戦い方。戦闘回数による。実際、一度の補給も必要とせず、全てのカルマを撃退した少女も居た」

それを聞いて安心する。サトシ以外の男にこれ以上身体を触らせるのは絶対に避けたいと彼女は考えていた。彼女は名案が浮かんだように両手を叩く。

「あ、そうだ。サトシが良くなったならサトシとエッチすればいいんじゃない」

魔力の補給とやらと、恋人とのスキンシップ。まさに一石二鳥。むしろ元気になったらこっちから襲ってやる。彼女はそう決意すらしした。

「それはお奨め出来ない」

「どうして？」

「説明はまた後日する。今は契約を進めよう」

彼女は不満そうに唇を突き出すが、確かにその通りだった。今は少しでも時

間が惜しいし、どちらにせよ、これ以上色々言われても頭が追いつかない。

家の前につく。

「さて、あんたをどう紹介しようかな。それとも裏から入るか……」

「心配には及ばない」

いとも簡単に、アカリの横で姿を消す。何度も目にしたが、いまだに慣れることが出来ない光景だ。

「便利ね。それ」

「誤解が無いように言っておくと、これは消えているわけではない。解脱による霊体化とは全く違う現象を利用している。君達の認識をずらしているだけだ」

「よくわかんないけど、家に入ったら喋らないでね」

「了解した」

家に入ると母親が事故の被害者がサトシだと既に耳にしていたようで、「どうだった？」と心配そうに尋ねてきた。

「まだわかんない。外傷は無いってさ」

「そうか……気を落とすなよ？ いや、無茶な注文だな。すまない」

「ううん。ありがとう」

会話もそこに晩御飯は不要と伝えると、アカリは階段を昇って自室へと戻った。サトシの部屋と同じような殺風景な部屋。しかし机の上にはサトシの写真が飾ってあった。サトシの部屋にも同様に、アカリの写真が飾ってあることを彼女は知っている。しかし毎朝彼女が起こしにいくようになって、彼はそれを引き出しに仕舞うようになった。

「六郎」

「どうした？」

音も無く姿を現す。

「ちよつと後ろ向いてて」

「了解した」

自分に背を向ける六郎を確認すると、彼女は写真のサトシにそつと口づけをした。

「大好きだよ。サトシ。あたしが、守ってあげるからね」

写真を元の位置に戻すが、ふと写真のサトシの視線が気になり、それを引き出しに仕舞う。やはり罪悪感には拭えない。しかし覚悟は固まっている。

（人形、こいつは人形……）



「レイプではない。契約だ」

相変わず六郎は無表情かつ抑揚のない口調でそう言った。

「これでお母さんが助けにきたら、あんたがインチキ野郎だって思い直せたの  
に」

彼女は残念そうにうつすら笑みを浮かべる。

「改めて信用してもらえたのなら幸いだ」

「あんたさ、その喋り方どうにかなんないの？」

「現時点ではこれ以外に選択肢は無い。アップロードの予定も無い」

アカリは鼻で笑うと一度大きく伸びをしてベッドに腰を掛けた。六郎はその  
前に立つ。

「君さえ良ければ私がリードするが」

「勝手にして」

六郎も彼女の隣に腰掛けると、ゆっくりとアカリの顎に指をかけて、自分の  
方へと顔を向けさす。二人の唇が近づく。しかしアカリは六郎の顔を両手で押  
した。

「……キス、は嫌なんですけど」



「君が挿入中に絶頂を感じなければ契約は成立しない。それを円滑に達成するための前戯なのだが」

「一回、無しの方向で試してみて」

「わかった。だが性行為というものは、お互いの協力が無ければ快感は生まれない。決して快感に対して冷めようとはしないでくれ。抵抗は構わない。それはより大きな快感を……」

「わかってる」

苛立つように六郎の言葉を遮る。アカリは真正正銘の処女だったが耳年増だった。女友達から聞く性の体験は、一見興味無さげに振舞っていたものの、いつも内心食い入るように聞いていた。自分とサトシがいつか行う行為への心の準備だ。

よく友達は、自分から気持ち良がってる声や表情を作ると言っていた。それは演技といえれば演技なのだが、自分を盛り上げるための演出だと言っていた。よりよりセックスを行う為には自分から積極的に快感に陥ようとする姿勢が必要だとその友達は言った。その意見は、多数の女友達の間でも同意の声が上がっていた。そういうものか、とアカリはその時すっかりと心にメモをしてい

た。どちらか一方が熱心になっていても駄目なのだ。

そうはいつでも初めての体験。アカリは目を瞑って、為すがままにされるしかできない。そもそもセックスによる快感を知らないのです、それに対して没頭も抵抗も無い。あるのは未知の快感という微かな恐怖と期待だけ。大多数の女性がそうであるように、勿論アカリもオナニーは経験済みであった。当然オカズはサトシである。写真を眺めながら、自分を慰めたことは何度かあった。しかし友人によると、オナニーとセックスのそれは全然違うらしい。他人の手で、強制的に絶頂に導かれるのは、恐怖を覚えるほどに幸福だと言っていた。しかしそれはあくまで自分も想いを寄せる相手だからだろう。

六郎の手がそつと彼女の肩を押し、それに抵抗しないようベッドに倒れる。彼の手が手馴れた様子で彼女の衣服を剥ぎ取っていく。彼女は目を瞑ったままそれを受け入れていく。幾分肩に力が入っているが、その程度は仕方ないと六郎も言及はしなかった。

すると衣服が脱げていく音がする。アカリは薄目を開けると、自分がいつの間にか下着と靴下だけになっていることに驚愕する。なるほど。こりゃ自信満々なわけだわ。出来るだけ平静を装うと、心の中でそう笑う。

彼の指の腹が、アカリの健康的な小麦色の肌を撫でる。ゆっくりと、首から胸の間、ヘソから腰をさする。六郎の手は意外なほどに暖かかった。不思議と嫌悪感はない。絶妙の強弱。まるでただマッサージされてるよう。純粹に、気持ちが良い。眠くなりそうだ。

いつの間にか肩から力は抜けて、完全にリラックスしている。彼の手が、内腿を撫でる。かあ、と身体が熱くなった。なんだか途端に恥ずかしくなって、手の甲を額に当てて顔を横に向ける。もうすでに、濡れ始めていることが自分でもわかった。

彼は中々性器を触らない。彼の指は胸の近くを通り、陰部を避けるように下腹部を撫でた。

「……はあ」

思わず吐息が漏れる。身体が火照っている。心拍数も上がっている。焦らされてる？ そう思うと、たまらなく切なくなった。いっそ自分で弄って、さっさとイキたいとすら思った。

「んっ」

甘い電流が走る。彼の指が、ショーツ越しにクリトリスを撫でた。六郎はア

カリの片手を握った。アカリは抵抗しない。そして余った片手で、ゆっくりと彼女の陰部を撫でる。

「んっ……あっ、………はあ」

彼女はくすぐったそうに腰をもじもじと左右に揺らし、額に当てていた手の甲を少し下げて、人差し指を噛んだ。先ほどまでの触れるかどうかの触り方は違い、六郎は「ごしごし」と擦るように彼女の下腹部を責めた。

「はあ……はあ……はあ……はあ、ん……あ」

頭にちりちりと電気が溜まっていく感覚。ぼうっとする。少しでも気を抜くと涎が出てしまいそう。明らかに自分で慰めるのとは違う。している事自体は同じなはずなのに、他人の、そして異性に愛撫されるということは、こんなにも身悶えしそうなほど甘いことなのか。

彼女は少し怖くなってきた。

気持ち良い。

つついっす口にしてしまいそうになる。

よく性欲に流される、という言葉聞く。気持ち良くなって、つい生挿入を許してしまったという友人の話の思い出す。そんな馬鹿な、とアカリは思っ

だが、ここまで身体の芯まで火照らされるとは思わなかった。こんな風にされるなら、してくれるなら、つつい色々と許してしまいそうになる。そんな気持ちだが、正直わかかってしまった。現にシヨーツを脱がそうとする六郎に、何の抵抗の意志も示せない。むしろ早く脱がしてほしいとすら、どこかで感じていた。六郎がシヨーツに手をかけて、それをゆっくりと下ろす。「ぬちゃあ」と音を立てて愛液がシヨーツに粘りついて糸になる。彼女はあまりの恥ずかしさに、歯を食いしばって、再び手の甲で両目を隠した。

彼の手が背中に伸びる。ブラを外そうとしているのだろう。アカリは協力するように、両目を塞いだままそっと背中を浮かした。ブラがするりと抜ける。完全に裸体を、サトシ以外の男に晒している。胸を締め付けられる。

その瞬間、六郎の指が、アカリの乳首を摘んだ。桃色の、充血しきってぴんぴんに硬くなっていたそれを突然摘まれたアカリは、「んっ、にゃっ」とだらしなく口を空けて身を振った。そのまま人差し指と親指でくりくりと挟む。

「んっ、んっ」

そのリズムに合わせて、彼女の背中がびくっ、びくっと微かに浮いた。もう片方の乳首をぬるりとした感触が襲う。

「ひうっ！」

指とは全然違う。薄目で見下ろすと、舌で舐められている。

また目を閉じると、手の甲で額をこつこつと叩いた。

「うううう」

左右の乳首を責められる。自慰とはあまりに違いすぎる感覚。勃起しきった先端を弄られるたびに熱い吐息が漏れる。しかし乳首だけでは切なくなるだけ。イケそうでイケない。頭の中が甘い電気でばんばんに膨れ上がる。一種の拷問のように感じた。触ってほしそうに腰がもじもじと揺れる。

そんな折、自分の手を握っていた六郎の手が離れる。それが下腹部に伸びる。彼女の股は、それを受け入れるように自ら左右に広がった。しかしその手は、内腿を撫でるだけ。離された手をきゅっと握り締める。

「……じ、焦らさないでよ」

出来る限り平坦な口調を心がけたが、その声は雄に懇願する雌の色気が混じってしまった。六郎は返事をせず、そのまま愛撫を続ける。

「こ、の……むかつく、あんた………あっ、はあ、あっ」

気が狂ってしまいそうなほどのお預け感。膝が曲がり、そして伸びを繰り返

す。

(もう、無理……)

アカリは自らの手を陰部に伸ばす。もう恥も外聞も無い。

(自分で処理してやる)

しかし六郎はその手を握って阻止する。

「あんた……本当むかつく」

「どうしてほしいか言うんだ」

「んっ、あっ、やっ、だっ、んっ」

乳首だけを執拗に責められる。両足は足踏みをしているかのように忙しく動いていた。彼女はぎゅつと下唇を噛み、六郎を睨んだ。しかしその表情はすぐに瓦解する。目じりが下がり、泣きそうな顔になると、「し、下………：触れ馬鹿」と精一杯の気力を振り絞り悪態をついた。

六郎は表情を一切変えないまま、余った手をすつと彼女の股に入れて、乳首と同様勃起しきっていたクリトリスを、ピンポイントで摘み上げた。

「ああああっ！」

背中が大きく反る。

「だめっ、だめっ、それはだめ！」

六郎はくりくりとその肉豆を回すように摘む。

「あつ、だめっ！ あつだめっ！ ……あつ、くう！」

一際大きく彼女の背中が浮く。

「はあつ、はあつ、はあつ」

余韻という生易しいものではない感覚に包まれる。他人に強制的に絶頂させられるということが、こんなにも暴力的に、甘く切ないものだとは想像だにしていなかった。手の甲で額を押さえながら、ぼんやりと天井を眺める。身体に力は入らない。麻酔でも打たれたかのように痺れている。

ふと六郎も裸になっていることに気づく。視線は顔から徐々に下へ。薄暗さに慣れた彼女の目に、生まれて初めて勃起した男性器が映る。

無理。

無理無理。

そんなの入るわけない。

ちよ、膝を持って左右に開けるな。ていうか抵抗……だめだ力入らない。やだ。自分のあそこがひくひくしているのがすっごいわかる。なんで？ さっきイ



ツたから？ あ、こら馬鹿。押し当てるな。そんなの入んないって。ていうか、今あたし、なんかひっくり返ったカエルみたいで恥ずかしい。うわうわ。なんかすっごい熱いのが当たってる。さきつぽ、そんな、熱い、の？ やっぱ無理だってそんなの。

「いくぞ」じゃないって。

ぶち、と何かが破られた音と共に、微かな痛みを感じた。

あ

……

ああ

……

ああああああ。

なに、これ。嘘でしょ。入ってる。男の人が、六郎が、あたしの中に、入ってる。入ってきてる。あたし、受け入れちゃってる。こんな、こんな奥まで来るもんなの？ 熱、い。ていうか、硬すぎ。これがおちんちん、なの？ 本当に？ 熱した棒とかじゃなくて？ 魔法利いてるの、かな？ 確かにそんな痛くはない、けど……うううう、なにこれなにこれ。火傷しそうなくらい熱い。

うう。形がすごいわかる。なんで先っぽこんなに膨らんでんの？ やだやだ気持ち悪い。あ、馬鹿動くな。んっ。なに、それ。あたしの中、すごい引つかれた。膨らんでる先っぽでこりって。うううう、また奥まで。やだよ、そんな……こないだよ。

あ、また引つかかれる。

あん。

何この声。

あたし？ 嘘だ。こんな声、出すわけない。あたしの声、いつもはずい低いのに。不機嫌なの？ っていつも聞かれるのに。こんな媚びてるみたいない声、あたしじゃない。

あ、また奥。

すごい。

本当に硬いし、熱い。

んっ、あつ、引つかかれる。これやばい。

ぎし、ぎし、ぎしって、これ何の音？ あ、ベッドか。大丈夫かな？ お

母さん気づかないかな。

あんっ、それ、だめだつてば。

そうだ。魔法で防音してくれてたんだ。だから大丈夫……ああっ……はあ、はあ。

うわすっごいにゆるにゆるって音鳴ってる。あたしの？ やだ。恥ずかしい。お尻にすっごい垂れてるのわかる……

あっ、あっ、あっ、あっ、あっ。

駄目。こんなの。でも、我慢しちや駄目だつて。あたしも気持ち良くならなきゃ駄目だつて。でも、でも、やっぱりこんなのやだ。

サトシ。

サトシが好きなのに。

あんっ、あんっ、ああっ、それ、はあっ、んっ。

サトシ、サトシ、ごめんね。ごめんね？

こんな声、あたしじゃない。あたしが好きなのは、サトシだけだよ。

ああ、それ、だめだつてば……ああっ、あっあっあっ、やだ、すごっ。

おちんちんって、皆こんななの？ すごい圧迫感、なんだけど。ううん。痛くはない、けど、ちよっと苦しい。あたしの中を押し広げられてる。すごく硬

いから、だから、その形がすごいわかる。なんか、すごいやらしいんだけど…  
…。なんでこんな先っぽ膨らんでんの？ 馬鹿みたい。

ああ奥、だめ。そこ、引っかいちゃ…：ああんっ。

サトシ。ごめん。サトシの為だから。守るからね。サトシの事。絶対絶対、  
サトシのこと、好きだから。

あっ、あっ、あっ、それ、それいいっ、やだ、あああっ、すごい。

ああっ、いいっ、気持ち良い…：ああもう、むかつくあんた。

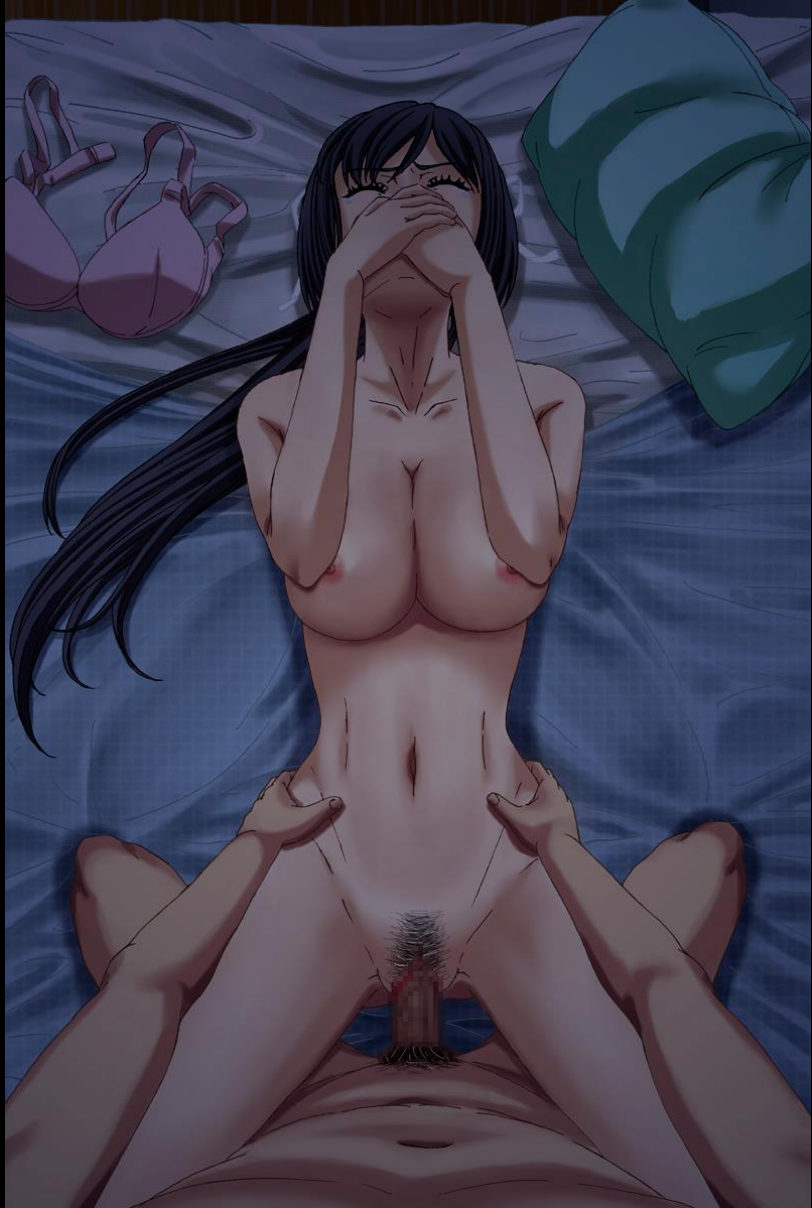
あっあっあっ、だめっ、すごい、それ、あああっ、硬い、

ああもう、奥、だめ、あっ、あっ、あっ。

サトシ、良くなったら、あああんっ…：はあ、はっ、あっん、海の神社行こ  
うね。恥ずかしいけど、手を繋いでほしいな。お弁当作るから。あそこの神社  
に二人で行くとね、結婚できるんだって。クラスの友達が言った、

あっ！ あっ！ あっ！ 奥、だめだっばっ！

え？ うん、硬い…：あんたのおちんちん、硬い。皆こうなの？…：こんな  
中で形がわかるくらい硬いの？ はあっ、んっ、それ、いい、うん、それ、あ  
っあっあっ、いいっ、いいっ、それ。なんか、あっあっ、中でビクビクしてる。



わかるよそれくらい。んっ、あっ、こら、顔近づけんな。キスしたくなる。だめ、キスは、絶対だめ。絶対、それは、サトシと、だから。それは絶対、無理だから。でも、こうやって繋がっていると、あんっあん……すっごいしたくなる、かも。

あっ、あっ、あっ、ん、んっ……え？ あ、うん……うっさいな、気持ち良  
いって言ってんじやん。ああ、なんか、中で、ちよっとおっきくなった、気が  
する。はあっ、んっ、あっ……あああっ、すごい、なに、これ……あんたも気  
持ち良いの？ 射精、するの？ 妊娠しないんだよね？ 絶対だよな？ んっ、  
きて、なんか、あたしも、ふわあつてなる。

あっ、やだ、すごっ、はげしい……よ……あっ！ あっ！ あっ！ あ  
っ！ すごいっ！ だめっ、こんなっ、だめっ、怖い、落ちる、落ちちやう、  
なに、なにこれ？ やだ、なんか怖いよ。なんかのぼってくる……あっ、あっ、  
あっ、くる、なんかきちやう。こわいよ、ね、ねえ？ 一回やめて、あっ、あ  
っ、あんっあ、もう……んっ、ああもう、マジで、だめ、だつて！ あっあっ  
あっあっ！ すごい、ああ、イキそう！ すごい、おちんちん膨らんで……ああ  
あっ、すごい！ イクっ、ああっだめ、ああイク、イク、イク……あああああ

ああっ！

……

……

……

はあ、はあ、はあ、はあ、やだ……なんか、すごい、びくびくしてる……あ  
んたの、すごいびくびくしてる……熱い……これが、精液？ ああ、すごい……  
……まだ、あたしの中で……こんな、震えて……やだ、まだ出てる……そんな、  
気持ちいいの？ あ、ん………なんか、ちょっと、嬉しいかも。でも……や  
っぱり、もう……やだ………そうだよ、これは……サトシを守る為だから……あ  
ん、こら、動くな……まだ、硬いんだから……あっ、あっ、もう、んん……。

息を荒げたままベッドの上で気だるそうに横たわるアカリをよそに、六郎は  
淡々とした様子でベッドから立ち上がり服を着る。

「契約は無事完了した」

アカリは微かに痙攣を続ける両手で顔を覆い、「……怖いからやだっって言っ  
たのに……」とか細かい声で呟いた。

「契約を無事完遂するためだ。君は若干の被虐待好があるようなので痛みを感じ無い程度に乱暴にさせてもらった。他意は無い」

「なにそれ？ あたしそんなんじゃない……」

「案外自分ではよくわからないものだ」

何か言い返そうと思ったが、股間をどろりと熱い粘液が流れ落ちる感覚に口を噤んでしまう。

なんとか息を整える。

「ねえ……あたし、変じゃなかった？」

「変、とは？」

「身体とか、反応……とか」

「私には容姿と同様に、価値観も平均という特性が付与されている。そんな私の個人的判断で良いのなら、君の身体は極上と評価するに迷いはない。適度に鍛えこまれ、しなやかに引き締まった身体。しかし乳房や臀部は女性らしく丸みを帯びている。少し厚めの唇や憂いを帯びた瞳は劣情を誘う。腫もきつく、そして柔らかく男性器を包み込んでくれた。君はいわゆる数の子天井と呼ばれる腫の持ち主だ」



ワインを評するかのように、真顔で淡々とそう口にする六郎に、アカリはまだ力が入らない身体でなんとか枕を投げつける。

「あんたが、カルマだったら良かったのに……自分の手でぶっ殺してやりたい……」

「私は質問に答えただけだ」

「……はあ」

彼女は大きいため息をついた。

「痛むか？」

黙って首を横に振る。

「そうじゃない……あたしって、やらしいのかな……」

泣きそうな声でそう呟く。その顔には極度の自己嫌悪が見られる。

「好きな人いるのに……初めてなのに……あんな声出しちゃって……イッチやってさ……」

「私が担当した処女の中ではむしろ反応が悪い方だったが」

「……嘘でしょ？」

「私達は特に性技に特化されて作られている。言うまでもないが、契約を円滑

に進めるためだ。性的快感を増幅させる魔術は難度が高いため私達代理人には使えない。だからこそ単純に高度な性的技術がデフォルトで搭載されている。なのですでに性的快感が開発されている非処女との契約では、失神するほど絶頂を繰り返す少女も少なくない」

「そっか……」

アカリは安心したようにため息をついた。それでも、その言葉は彼女が抱く罪悪感を、ほんの僅か慰めただけだった。股間にはまだ何か挟まっているような感覚が残る。それがサトシのものでない事が、彼女の胸を締め付ける。

「さあ、これで君はもう解脱が出来る魔法少女というわけだ。解脱という言葉が気に入らないのなら変身という言葉を使うが」

「どっちでもいいよそんなもん」

「以前担当した女性が、そこに拘っていたものだな」

「それでは、目を瞑ってください」

そして今に至る。

家の屋根を蹴った。隣の家の屋根まで5mほど。助走も無しに軽々と飛び移

った。その程度のこととは可能だと確信はあった。徐々に魔力が身体に馴染んでくるのがわかる。身体が軽い。次々と民家の上を飛び移っていく。身体に当たる風圧には身に覚えがある。ジェットコースターだ。

道すがら、サトシが治療を受けている病院の前を通る。一瞬で前を通り過ぎるが、その際に横目でその建物を一瞥する。待ってて。そう心の中で呟いた。

カルマを感じした場所に到着する。臨海コンビナートの中の倉庫の屋根に、あの巨大なクモがいた。まるで食後の昼寝といった様子で動こうとしない。その目の前に、ミサイルのように衝撃音と共に着地する。

クモはようやく危険を察知したようだ。威嚇するように首を持ち上げ、不快な鳴き声で叫ぶ。八つも並ぶ目玉がぎよろぎよろとあたしを値踏みするように睨んだ。馬鹿か。今更そんなもんで臆するとも思ったか。あんたと対峙する為に、どんな恥辱を受けたと思ってる。八つ当たりのような怒りが湧き上がる。クモは現実のそれと同様に八本の脚を有している。それぞれが大鎌のように鋭く尖っていた。後ろ半分の八本の脚で立ち上がるように上体を起こすと、前の四本を同時に振り下ろす。一步後ろに下がり難く避けた。

見える。驚くほど落ち着いている。クモが前脚を再び持ち上げようとする。

遅い。中段に構えたまま距離を詰め、信綱を顔面に叩きつける。面。一本もの。手ごたえ有り。目の半分以上を潰した。

カルマは緑色の粘液を撒き散らし後退する。逃がさない。もはや殺意も、敵意すら無い。ただの一本の刀。そこに意思は無い。ただ、斬るのみ。

顔面を守ろうとしているのか、不快な鳴き声を喚き散らしながら、前の四本脚で支離滅裂に攻撃を仕掛けてくる。

右、打ち落とす。左、払いのける。余裕。弓枝先生の小手や、サトシの正拳中段突きに比べれば、欠伸が出そう。

信綱によって切り裂かれ、千切れた脚が宙に舞って飛んでいく。断面から緑色の粘液を撒き散らしながらもなお咆哮する。

前脚はあと二本。左、受ける。鏑迫り合い。力は、互角らしい。拮抗。やや押し返す。右から払うように鎌首のような脚が迫った。競っていた左脚を受け流すとそのまま迫る右脚に打ち下ろす。ぐしゃりと音を鳴らして脚の先端が爆ぜるように潰れた。

前脚は残り一本。大勢は決した。しかし残心。中段に構えなおし、息を止める。その瞬間、クモは後ろ脚全てを使い再び立ち上がると、まるで蜂が獲物を

刺す時のように、腹部を丸めてこっちに向ける。その先端から、視界全てを覆う壁面のような糸が押し寄せた。

サトシは夢を見ていた。自分の好きな女の子の夢。

自分以外には無愛想で、どこか冷たい印象を持たれがちな女の子。でも本当は結構ロマンチストで、おまじないとか信じてる女の子。

クラスで飼っていた猫が死んだのに、涙も浮かべなかった女の子。皆が帰った後、内臓が飛び出ていた猫を、優しく抱くように持ち上げて、一人公園でお墓を作ってあげてた女の子。

毎朝起こしに来てくれる女の子。ずっと好きだった女の子。

ようやく、恋人になれた。デートの約束も出来た。

まだ、死ねない。キスもしてない。

サトシは夢の中で、彼女の声を聞いた気がする。

白い壁が迫る。直感で理解する。捕らえられたら最後。逃げることは叶わない。左右上下に避けることも間に合わない。後退？ 論外。上段に構える。

爪先から剣先まで、神経が繋がる。電流が地面から身体を伝わって信綱に流れていく。剣先のノズルが開く。天を向くノズルからは青い炎が光線のように吹き出た。

迫る巨大な脅威を目前にしても、迷いは無く、恐れも無い。ただ、手首を返し、振り下ろす。

伸びた青い炎が弧を描く放射線状となり、白い壁を切り裂いた。斜めに切り裂かれた壁状の糸はアカリを避けるようにそのまま左右へ流れていき、青い炎の刃筋はその糸の向こう側のクモをもそのまま一刀両断した。

一瞬の間を置いて左右に身体が分かれたクモは、そのまま霧散すると、アカリは膝をつきそうになるほどよろめく。最後の技を使った消耗による疲労が激しい。しばらく残心の姿勢を維持すると、「……サトシ」と安堵の呟きを口にして、その場に膝をついた。

不意に拍手が聞こえる。億劫そうに首だけを音の元へ向けた。

アシンメトリーの金髪をなびかせる若い男が立っていた。切れ長の目に通った鼻筋。背丈も高い。しかし見るからに軽薄そうな男。うっすらと桃色の光を纏っている。

「いやあ良いもん見せてもらったわ。やっぱ魔法少女といたら必殺技はビームっしょ」

アカリは信綱を杖がわりに身体を起こすと、

「……あんたも、代理人？ それとも、カルマ？」と口にした。

今の自分の姿を感知できているということは、その二つに一つ。

「もしカルマだったら？」

ふらつく足の気をなんとか整わせると、ふたたび中段に構えなおす。

「ここで、消す」

安堵を浮かべた目元に再び殺気が宿る。

「おお怖え。六郎先輩もえらいの担当してるな」

男はからかうように笑うと両手を上げて、

「俺も代理人だよ。七雄っていうんだ。まあ一つよろしく」

「……証拠は？」

警戒心を解かないアカリに苦笑いを浮かべ頬をかく。

「まいったな。カルマに言葉を喋るタイプは存在しない、って言っても信用してくれそーにねーな。帰ったら六郎先輩に聞けば良いよ。そのうちまた会うだ

ろうし、その時はよろしくな。ア・カ・リ・ちゃん」

七雄は笑い声だけを残り姿を消した。

「どいつもこいつも、勝手に出てきては勝手に消えて……」

そう悪態をつきながら、その場に座り込む。しばらく休憩すると、力はそれなりに回復したようだった。彼女は再び民家の家の屋根を飛び移り、そして家には直接帰らず、病院へと寄った。閉まっている玄関にどうしようかと一瞬間を悩ますが、自分が今霊体であることを思い出す。しかし通り抜けようとしても、それが出来ない。六郎の言葉を思い出す。

『無機質物体にも霊体は宿っている』

そうだ、と思い返す。家の窓も『こちら側』の窓を開けてたじやないか。じやあ玄関の霊体を叩き壊せば通り抜けれる、という考えが頭をよぎるが、それが実体側にどんな影響があるのか彼女は知らない。仕方なく、彼女は裏口の方へと周り、ロッククライミングよろしく壁をよじ登った。幸い人目につく危険も無かったし、なにより基礎体力も大幅に強化されてるようで、全く苦も無くサトシの病室の部屋まで登る。客観的に見たら、初めて見たカルマみたいな状態だな、と自嘲的に笑う。



病室を窓の外から覗く。サトシがベッドに寝ていた。見ていただけで穏やかな気持ちになれるようなオレンジ色の発光をしている。

その目がゆっくりと開く。その視線は天井を眺め、そしてアカリの方へと向いた。今のアカリが見えているはずはない。しかしサトシは、アカリに向かって何か口を動かした。

すぐに看護士が入ってくる。遅れて医師。そしておじさん。会話は聞こえない。しかし皆笑顔を浮かべている。アカリは霊体のまま涙を流した。

今日はよく泣く日だ、と一人ごちた。

家に戻ると開いたままの二階の窓から入る。六郎はベッドの傍で眠っているアカリの実体を見守っていた。裸のままだったからか、上にシーツを掛けてくれている。たまには気が利く。

「うまくいったようだな」

「無用心ね」

「何がだ？」

「窓、開いたまま」

「それは冗談か？ 窓の霊体だけが開いている状態で侵入できるのは、同じ霊体

であるルマか魔法少女だけだ」

「冗談よ。面白いでしょ？」

六郎は「ふむ」と顎に指を添えて考え込む。

「で、あたしはどうやって戻ったらいいわけ？」

「実体に身体を重ねればいい」

寝ている自分に重なるようにベッドに横になる。どっと疲れがわく。このまま寝てしまいたい。しかしある種の興奮状態が残っているのか逆に目が冴える。気がつくと元の身体に戻っている。起き上がってシーツを取ると、そこには武道袴ではなく見慣れた自分の裸があった。ポニーテールを確認すると、あの髪飾りも無い。

「どうだった？ 初めての实战は？」

「とりあえずこっちは見るな！」

枕を六郎に投げつけて服を着る。

「色々聞きたいことあるけど、先に病院行ってくる」

「そうか」

「もうサトシは大丈夫なんだよね？」

「少なくとも次のカルマが出現するまでは命の危険は無い。とはいっても、入院はしばらく続くだろうが。彼は本当にギリギリだったのだ。しばらくは体力が戻らないだろう」

「わかった。じゃあちよつと様子見てくる」

「ああ。私はお暇するよ。他にも仕事はあるのでね」

まだ家族は皆寝静まっている。こっそりと家を出ると、空が明るみだした街を走る。身体が鉛のように重いがそんなことは言っていられない。

病室の前では医師と叔父さんが話している。おじさんはアカリの顔を見ると表情を綻ばせ、「さつき意識が戻ったよ。峠は越えたそうだ」と安堵のため息を漏らした。

「会ってもいいですか？」

「短時間なら」

扉の前で一度深呼吸。ノック。返事。入室。

「よお」

顔色は悪いが、いつもと同じように口を開くサトシの姿に胸を撫で下ろす。

「どうしたんだよ？」

サトシは意地悪そうな顔を浮かべてそう言う。アカリは一度鼻を噉ると、「ほら、たまには普通に起こしてみようかなって」と言った。

「あっはは。でも俺は今日学校いけねーぞ」

「そっか。じゃああたしもサボろーかな」

「ばーか」

二人で笑いあうと少し間が開いた。

サトシから口を開く。

「目が覚めた時さ、お前が居た気がした。ほら、その辺に」と窓の外を指した。

アカリは言葉を喉に詰まらす。サトシを救うために自分がした事。捨てたも

の。今もじんじんと甘い痛みと、肉棒が貫いた余韻を残す下腹部。それらを強引に飲み込んで笑顔を浮かべる。

「ずっと祈ってたからね。早くねぼすけが起きますようにって」

「そうか」

「うん」

どちらからともなく、手を繋ぐ。直後に病室の扉がノックされた。二人は慌てて手を離す。気恥ずかしそうにお互いの顔を見つめると、照れくさそうに笑

顔を浮かべあつた。

第一話 「魔法少女、始めました」  
おわり

名前：神崎アカリ  
年齢：S校二年生  
身長：163cm  
体重：52kg  
3サイズ：B6（E）、60、88  
レベル：1

属性：林

得物：信綱と名づけられた竹刀のようなもの。

装甲：深紫を基調として武道袴。髪留めは赤いハイビスカス。



趣味：特に無いが、サトシの趣味であるゲームや野球観戦には大体付き合う。

男に合わせて自分を染めるタイプ。

好きな食べ物：白身魚の刺身を一切れご飯の上に置いたお茶漬け。

容姿：B（芸能界での活躍が見込めるレベル）

学校、職場など、属する組織で指折りの外見を持つ。

大抵の異性は彼女の容姿に好感を持つ。芸能界

ただし取っ付きづらそうな顔立ちをしている上に、

実際サトシ以外にはそれほど社交的ではないので、

寄ってくる異性はそれほど多くない。どちらかという同性にもてるタイプ。

胸部や臀部は女性としての丸みを帯びつつも、その肢体は過度に筋肉質でしなやかに絞り込まれている。

特殊技能

空の境地（探索）：A

自身を中心に、街一つを飲み込むほどに意識を拡散させて活動中の魔力体の位置を感知することが可能。

空の境地（戦闘）：B

戦闘態勢に入ると自動的に展開される。範囲は最大10mほど。

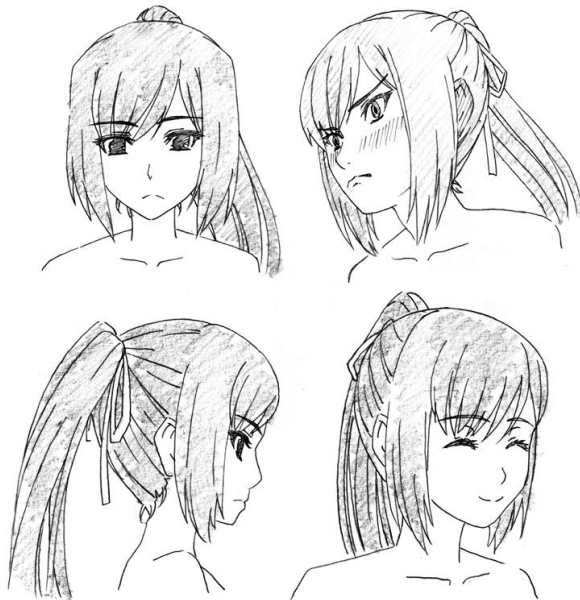
対峙する相手の息遣いや筋肉の動きを鮮明に捉え後の先を取る。急所を発見することも可能。

一の太刀：B

信綱の先端から放たれる光線状の魔力攻撃。射程は最大で50mほど。

大抵のカルマを一撃で屠るが、一呼吸ほどの魔力凝縮時間が必要。

消耗が激しく連発は利かない。



対サトシ専用笑顔

基本性能

魔力容量：C

拘束すべき点はない。

霊体耐久力：D

やや低いが単発の攻撃には耐えられる。

攻撃性能：B

遠空攻撃においては並の性能。しかし一の太刀は大抵のカルマを屠る威力に対しては燃費は良く、

近接、遠距離戦闘どちらにも対応出来る。

防御性能：A

空の境地を展開した彼女を相手に、尋常たる一対一で攻撃を直撃できる相手は限られている。

素早さ：B

跳躍力、敏捷性、最高速度。そのいずれも特化しているとはいえないが高いレベルでままとまっている。

それぞれの項目を得意とする野生の獣並。またはそれ以上。

備考：

スペック上はこの時点で作中最強グループに位置する。

しかし物語の都合上、不覚を取ることが多い不遇なヒロイン。